
逆転トリップ!

ちくわ犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逆転トリップ！

【Nコード】

N9846J

【作者名】

ちくわ犬

【あらすじ】

水の國の第二王子翡翠は陸の國に行く途中に異世界にトリップしてしまいます。しかも24歳の彼が今は推定5歳…。「カオリ」のところまで居候しながら元の世界に帰る手だてを模索します。トリップで来られてしまった側の視点で進むファンタジー。

家族は減りそして増える1（前書き）

1話づつでお話がまとまるようにして、のんびりほのぼの更新していきたいと思います。気長におつきあい下さい。

家族は減りそして増える 1

ジイ様が亡くなった。

変わり者だと言われていたが親せきの中で唯一私たちを引き取り、愛してくれたかけがえのない存在だった。

私と妹は私が8歳、妹が5歳のときに両親を亡くし、その後この家で育てられた。閉鎖的な感じすらするこのド田舎の村で。

今時珍しい（古すぎる）日本家屋はもちろん平屋でトイレも公衆トイレのように庭の角に独立してある。草抜き選手権なるものがある、姉妹で入賞は果たしているくらい手入れさせられた庭をみながら私と妹は縁側に並んで座った。

「死んじやったね。」

視線の先にある椿の花を見ながらポツリと妹が言う。92歳だったのだから世間で言う大往生だろう。最近ボケてきたなとは思っていたが、まさか朝冷たくなっていようとは予想もしていなかった。

「良い顔していた。」

少し笑ったような良い顔だった。仏様そのもののような優しい顔。あんな死に方を私もしたいと思った。3軒先の与太郎爺さんが亡くなったときは鬼瓦みたいな顔していたというし。

「サトがひまごを3人も抱かしてやったから満足したんじゃないか？」

「やしやまごまで頑張ってくれて良かったのに。」

妹は胸に抱く幼子をあやすように揺れながら優しくその背中を撫ぜて言う。

「ヒロは5歳なんだから…あと20年ほどはいくらなんでも無理だったろう…ところでヒロとミチは？」

「また池のどこじゃない？あの子たち鯉が好きだから…。」

「…伯父さん騒いでたな。」

「お金が絡むと怖いわよね。私たちを引き取るの何のって時は知らん顔して今の今までほったらかしにしたくせに！ジイ様のお葬式の最中から遺産分けの話しばかり！ジイ様の遺産って言ってもお葬式代出して相続税払ったらとんとんどしょ？この土地売ったって売れやしないわよ。弁護士さんにジイ様が遺書を残してくれといて良かったよ！愛されてるよね？私たち。ね、カオちゃん。このままここに住んでくれない？この家守ってくれないかな？」

「いいのか？ジイ様はここを売ってお金にしてサトと私で分けると書いてたろ？」

「二人にすべてを相続する…だからいいんじゃない？明人さんもそうしたらいいって。カオちゃんが近くにいてくれたら心強いし、道場も続けられるでしょ？」

「まあ。私もその方が助かるが。」

「カオちゃんがお嫁に行くまででもいいからさ。」

「……。」

「もしかして予定あった？」

「有ると思うのか？」

「…ごめん。」

「池の方を見てくるよ。いくら毎日きてたってチビたちだけじゃ危険だからな。連れてくるから一息入れよう。」

「うん、カオちゃんお願いね。」

慌てて出してきた喪服は古く、故人のものだった。女にしては背の高い私にあつらえたような若かりしジイ様が着ていた黒いスーツ。防虫剤の臭いが鼻につく。ジイ様のために着る日が来ようとは。

…喪主という立場にびったりだな。

少しネクタイをゆるめながら目的の場所へ急ぐ。

葬儀屋の親父には「ご長男さま…」と連発されてサトが肩を震わせていた。確かに男に見えないこともない。先ほどいた庭と反対側にある東の庭には池が有って数十匹の鯉を飼っている。決してお金持ち趣向ではなく、ジイ様が気まぐれで飼っていたのが増えたに過ぎない。鯉の色も柄もいたって単調。池だってジイ様のお手製で時々デッキブラシで掃除しないといけない。面倒だが馴れて掃除中に寄ってくる鯉はかわらしい。甥っ子たちは鯉の池でのエサやりが大好きなのだ。

「りゅうはのけん！やあ〜ッ！」

「おれ、のちやから〜！（ちから）」

…またチャンバラごっこしているな。

現れた私を見てチビたちが嬉しそうに寄ってくる。

「おやかたさまだ！」

「おやかたしやまら！」

だからお館様と呼ぶなと言っているのに。

録画した「戦国戦隊 キラレンジャー」という子供番組を毎日毎日飽きもせず繰り返し見ている兄弟にとって今やあの番組は言葉のバブルだ。…相当侵されている。テレビはいかん。テレビは。

「みずのくからのししやがまいりました！」

「…そうか。」

否定しても面倒なだけなので取り敢えずは合わせてやる。へそを曲げると面倒なのだ。

「あちらで茶菓子でもどうかな？そなたたち。」

そういった私のところにヒロとミチが一人の子供の手を引いてきた。なんだ、いつの間に増えたのだ。

「ヒロ、友達か？」

「うん。キスイっていうんだって。」

…いうんだって。なんだその今初めて会いました的な表現は。

ヒロとミチの手に引かれている子を改めてみる。

この辺りで見かけたことの無いような子だ。切れ長の美しく大きな瞳にはこれでもかと言つほど長い睫がついている。大人びた感じがする整った顔の子だ。さらさらとした髪はふんわりとウエーブしていて肩にかかっている。

「キスイは男の子か？」

近くで祭りでもあったともとれる着物のような甚平のような変わった服を着ていた。…キラレンジャーの仮装かもしれない。右目に黒い眼帯をしている。眼帯はテレビでは左だからニヤミスだ。たしかキラレンブルーだ。服の色もぴったり。

「わしは水の國から来た第二王子の翡翠だ。ここは陸の國であるか？」

ヒロよりしつかり話すな。学芸会では主役選ばれそうな子だ。いまからそんな整った顔では先が思いやられる。さぞかし美少年になるだろう。ちなみにヒロは「ももたろう」で立派にやる気の無い赤鬼の役をこなした。あんなに脱力した踊りを踊れる5歳児も珍しいだろう。肩を落としたサトが「写真だけいい」と言って業者に頼むDVDの申込用紙をゴミ箱にやっていた。

「キスイじゃなくてヒスイというのか？お母さんはどうした？ここで遊んでいるのは知っているのか？」

3歳のミチほどではないがヒロもあまり呂律が回らない…というよ

り言ってること自体が半分ほど怪しい。5歳児とは現実と空想の狭間で生きているのだ。

「まあ、いい。中でみんなでおやつにしよう。ヒロ、ミチ、ヒスイと一緒に洗面所で手を洗っておいで。」

「「はあい。」」

葬儀が終わって遺産がもらえないとわかった伯父はさっさと帰ってしまった。ジイ様は骨になって今小さな壺に詰め込まれている。斎場にいるときは「オオジイ、オオジイ（ジイ様のこと）」と大泣きしていたヒロとミチが焼かれて出てきたジイ様の骨を嬉々として骨壺に入れる様にはサトと顔を見合わせてしまった。彼らにすれば骨になっただけ別物らしい。おかげでジイ様はぎゅうぎゅうと蓋が浮くほど詰め込まれてしまったが。

台所に行く畳の部屋の一角にクルクルと行灯が回っている。花と果物に埋もれて不自然な笑い顔のジイ様の写真が置いてある。写真嫌いのジイ様がヒロの学芸会に行ったときに隠し撮った写真だ。きつとあの踊りを見て苦笑いしたときの顔なのだろう。祭壇の手前に有る机にお菓子を乗せてやる。3人いるなら分けてやった方がいいな。

「クルクルしてゆ」

小さな子供には格好のおもしろ物である行灯は葬儀社からのレンタルなのでやんわり牽制しておかないと。

「そこにあるのは触ったらダメだよ。ビリビリ怪獣がくるから。」

途端にミチが手を引っ込める。次男はビビリ王子なのだ。

「カオちゃん。お茶入れようか？」

三男トモを寝かしつけたと思われるサトがやってきた。

「あれ？一人増えてるよ？近所の子じゃないよねえ…。」

「キスイっていうんだって。」

「ヒロ、ヒスイ。ヒスイくんだよ。あ、え〜とくんでいいのかな？」

私が聞くとヒスイは頷いた。

オレンジジュースが3人の目の前に出される。

「「いただきます！」」

手と声を合わせてチビがお菓子和ジュースに手を伸ばした。

「どうした、ヒスイくん。召し上がれ。」

「これは何と言うものだ？」

不思議そうにモチいり最中を見ている。

「も・な・かだよ。初めて？」

サトが答えてやるとおそろおそろヒスイがモナカに手を伸ばした。

「……うまい！」

それからガツガツと3人は小さな皿を空にした。ヒスイはジュースも初めてだと言っておかわりした。コップも空になったところでヒスイがサトと私に向かって正座し、膝の上に拳を軽くのせながら話しを شدした。

「わしは先に話した通り、水の國からきた。陸の國に行く筈だったのだが従者ともはぐれ、どうも道を誤ってしまったようだ。すまぬがここがどこなのか教えていただけないだろうか。」

…すらすら喋るヒスイに感心しながらサトと顔を見合わせる。要するに、

「え〜と、迷子になっちゃったのかな？」

サトが優しく解釈する。ここは幼児語の解読に長けるサトに任せるにかぎる。

「お名前、全部言えるかな？ここには初めてきたの？」

「真名は家族になるものしか言わん。ここは初めてだし、なぜか今は幼子の姿になっておるが、わしは大人だ。」

「…つまり名前を言わないように言われていて知らないところに居たと。あと…キラレンブルーは次回呪いがとけて元の大きさに戻るんだよね？」

「ドクロだいまようがのろいをかけてちっちゃくなっちゃったんだ！。とっつー！」

サトの問いかけにヒロが得意げに答える。

それから辺りが暗くなり、夜も更けてきたがいつこうにヒスイを迎えに来るような人はいなかった。

夕飯を食べさせるとヒスイはまた「初めて食べる」を繰り返している、貪るようにたくさん食べた。

サトが私に目配せした。なんだかいやな予感がしながら腰を上げて廊下でサトの話しを聞く。

「あの子、庭に居たんだよね？この辺の子ならこの道場はみんな知ってる。…変じゃない？」

「変？」

「大人が名前を言うなっていつて知らない場所に置き去りにした…とか。」

「捨て子だったことか？」

「最後にあんな凝った格好させて機嫌とって来たとしても不思議じゃ無いよね。」

「……。」

「取り敢えず、保護してるって警察に届けよう。ジイ様が亡くなつてから現れた子だもの。無下にはできないよ。」

「わかった。」

…地図が見たいと言ったヒスイをサトに見てもらってこの村に1つ

しかない派出所に相談をしたが
サトが言っていたことが正しいのか、子供を探しに来た人は誰もい
ないといわれた。仕方がないので現れたら連絡をもらえるよう頼ん
で帰ってきた。

「今日は泊まるよ、カオちゃん。ヒスイくんのごとは後で考えよう。
色々あつて疲れたしさ。」

さあ、お風呂はいるよ〜！お母さんとはいる人〜！」

「はい」と自分で言つて3男トモの手をあげる。生後6ヶ月児に
は他に選択はないだろう。

「おかあさんとはいる〜！」

「はいゆ〜！」

見事にサトの心理作戦に引っかかりサトと入ると言い出す兄弟。予
想通りの展開だ。

先にあがったトモに着替えをさせているとサトがチビたちと風呂か
ら出てきた。トモはなかなか貫禄のある面構えだ。かわいいやつめ。

「カオちゃん、お先でした〜。」

ヒスイを脱衣所に連れて行き、さっさと服を脱いで隣にいるヒスイ
を裸にひん剥こうとした。ここまで平気でついてきたのにヒスイが
真つ赤なカオをして背中を向けた。

「わ、わしは女子おんなと風呂は入らん！」

…おなごと来たか。入ると長風呂のくせにどうしてこう入るときは
渋るのか…幼児は理解できん。2者選択できなかったヒスイはまだ
ごねしろ（ごねる理由）が残っているのだろう。しかしこの風呂
はジイさまの好みで子供が一人で入るには根性と技術がいる五右衛
門風呂なのだ。

「この館の主は私だ！従えぬというのか？」

必殺、最近覚えたキラレンジャーネタでどうだ！
ヒスイが下を向いたまま青い顔になった。

「せめて何かで体を隠してはもらえぬか。」

…大人の女の人と風呂に入ったことが無いのだろうか。取り敢えず
それではいるというなら、この凹凸のない体も隠して進ぜよう。大
判のタオルを体に巻く。よしよし。ついでに

「眼帯ももう取ろう。顔もきれいに洗わねば…。」

観念したのか素直にヒスイが眼帯を取った。

「なっ！」

思わず声を出してしまった。お遊びで付けているのだと思っていた
黒い金属のような眼帯を取るとそこには刃物で切られたような傷の
入ったつぶされた目があった。まぶたは閉じられ、一文字に傷が通
っている。よく見れば体にも無数の傷がある。古いものから新しい
ものまで…

この子は…虐待を…？

目頭が熱くなる。ヒロとかわらないような子供がこんな目に…。

情けなくも溜まる涙をヒスイに気づかれないうちに体を洗ってやった。ヒスイは始終顔を背けていたが大人しく洗われた。風呂から出るとサトが用意したパジャマ（ヒロものだろう）を着せてやって眠らせた。……疲れたのかすぐに寝息が聞こえた。

それから

1ヶ月経ってもヒスイを探しているという者は出てこなかった。

「ふんこころん」(前書)

翡翠視点です。

うつくしいひと

水の國で起きていた15年に及ぶ統治争いが終焉し我が父群青が水の國の王となり平穩な時代がやつときた。荒れ果てた城下の復興も随分進み、兄萌葱の婚礼の儀も慎ましいものではあったが行われた。

城も落ち着き、跡継ぎとなる兄も無事に嫁をもらった。わしはこれで隠居して剣術などを伝えながら生きていこうと思っていた。武將としても戦う必要は無い。城に残ったところで政務の手助けができるとは思わなかったし、未だくすぶる跡継ぎ問題で担がれてはたまらない。そう思っていた矢先に父上が陸の國に留学をする話をもつてきた。貧しい水の國とは違い、陸の國は豊かだと聞く。陸の國の武芸にも興味があつたわしは二つ返事で承諾した。「門」を開き、従者であり幼なじみの戦友琥珀と陸の國へと向かつたのだが…。

「ここは…。」

目の前には幼子が二人。大きな目を見開いてわしのことを見ていた。…二人は兄弟なのだろうよく似ている。

「どこからきたの？」

少し大きい方が子が聞いてきた。ここは陸の國なのだろうか…。それにしても奇妙な格好をしている。陸の國で流行っているのだろうか。

「水の國からきたのだが…。」

言いかけて違和感に気づく。どうしてこんな幼子と目線が合うのだ

？しかも自分の声が酷く高い。嫌な予感がして池の縁に立ってのぞき込んだ。

水面には先ほど出会った幼子と変わらない小さな子が映っていた。事態を受け入れることができず、惚けていると後ろから声がする。

「キラレンブルーでしょ？」

…何をいつているのかさっぱりわからんがきらきらした目がこちらを見ている。

「おれ、ヒロ。おれ、キラレンレッド！」

「…翡翠だ。」

「ミチはあ、ブルーれしよう？」

「ブルーはキスイだよ！」

「ミチはキラレンゴーユド！」

「もう！そんなのないだろ！ミチ！」

「りゅうはのけん！やあ〜ッ！」

「おれ、のちやから〜！）ちから（」

いきなり二人が襲いかかってきたと思えば向こうから黒い服を着た男がやってきた。

「おやかたさまだ！」

「おやかたしやまら！」

その言葉でようやくここが誰かの屋敷の一部であることに気づいた。どうやらこの男がこの屋敷の主であるようだ。すこし目尻のあがった艶のある男。しかし立ち振る舞いは一部の隙もない。ただ者ではないようだ。

「みずのくからのししやがまいりました！」

「…そうか。」

二人の子供がじゃれるように男に寄っていくと男は優しく頭を撫でた。この兄弟の父親なのかもしれない。

「あちらで茶菓子でもどうかな？そなたたち。」

…そういえば腹が減った。向こう（陸の國）の方が食事情がよいので、ついでから食べようと琥珀が言ったので昼食を抜いたのだ。

「ヒロ、友達か？」

「うん。キスイっていうんだって。」

その言葉で男がわしを見た。思ったより優しい視線だったのはわしが今幼子の姿だからかもしれない。

「キスイは男の子か？」

その言葉に思わず頷いた。そういえば小さいときはよく間違えられた。

「わしは水の國から来た第二王子の翡翠だ。ここは陸の國であるか？」

とにかく事情を話して助けを求めるしかないだろう。男は少し考える素振りをする

「キスイじゃなくてヒスイというのか？お母さんはどうした？ここで遊んでいるのは知っているのか？」

なんとも意思の疎通というものが皆無だ。この男が着ている服も奇妙だし…。

とにかく何か食べるものがもらえそうな雰囲気になったので取り敢えずはご相伴にあずかることにした。

幻想的な行灯が回る部屋の中に祭壇らしきものがあり、厳格そうなじいさんの絵が置いてあった。周りには見たこともない花と果実が置いてある。どうやら死者を祀っているようだ。

「モナカ」という菓子も「ジュース」という飲み物も甘くとてもおいしかった。

夢中で食べていると「好きなだけ食べていい」とおかわりもさせてくれた。

ひとまず腹の虫も収まったので話を切り出した。

「わしは先に話した通り、水の國からきた。陸の國に行く筈だったのだが従者ともはぐれ、どうも道を誤ってしまったようだ。すまぬがここがどこなのか教えていただけないだろうか。」

落ち着いて話したつもりだったが返ってきたのはこんな言葉だった。

「え〜と、迷子になっちゃったのかな？」

サトと呼ばれていた子供らの母親が答えたのだがどうもわしのこと
は幼子だと思っっているようだ。

「お名前、全部言えるかな？ここには初めてきたの？」

「真名は家族になるものしか言わん。ここは初めてだし、なぜか
今は幼子の姿になっておるが、わしは大人だ。」

「…つまり名前を言わないように言われていて知らないところに居
たと。あと…キラレンブルは次回呪いがとけて元の大きさに戻れ
るんだよね？」

「ドクロだいまようがのろいをかけてちっちゃくなっちゃったんだ
！。とっつー！」

また訳のわからん単語が出てきて混乱する。何を言ってもいっこう
に伝わらない。

夫婦はわしの両親が迎えに来るのを心待ちにしているようであった
が、無論、そんな者は来るはずもない。夜も更けてきていよいよ放
り出されるかと思っただが放り出されるどころか上手い食事になりつ
けた。

幼子と決めつけているであろう夫婦はわしの言うことを信じようと
しないので地図を見せて欲しいと頼んだ。母親はすぐに地図を持っ
てきてくれて目の前に広げた。さきほどのじいさんの絵といい、ま

るで何かを写し取ったような絵が紙についているものもあった。そこに書かれている文字は完全に見たこともない文字で、一連の事を思い返すとここが陸の國ではあり得ないということと知らない世界に来てしまったということが推測できた。水の國を出るときに言葉の呪術をかけていたので言葉は通じるようになっていたのかもしれない。唯一天の國には行ったことが無かったが、あそこの人間は皆金髪だと言うし、ここは雲の上でもなさそうだ。

親子が風呂に入りに行き、先上がった赤子を男が器用に服を着せてやっていた。この世界の男は子育てに協力的らしい。後から三人が風呂から上がってきてわしは男に連れられて風呂へと向かった。

ためらいもなく男が服を脱ぎ捨ててわしの方へやってきた。

男？

なめらかな白い肌はきめ細かく、胸には小振りだがしっかりとふくらみを持つふたつの丘があった。淡い桃色の先端は上を向き、柔らかそうな下の毛の中にはついていないはずのものが当然のようについていなかった。

お、おんな！

子供らの父親だと思って疑いもしなかったが、よく見れば線も細い。

「わ、わしは女子おんなと風呂は入らん！」

見ているのが憚られて背を向けた。すると男だと思っていた女が言う。

「この館の主は私だ！従えぬというのか？」

低い声で屋敷の主にこういわれては逆らうのもためられる。何しる相手は自分のことを幼子だと思っっているのだ。

「せめて何かで体を隠してはもらえぬか。」

なんとか体を隠して貰って一緒に風呂に入ることとなったのだが眼帯を取って顔を見上げると女が驚いた声をあげた。無理もない。片眼は数年前の戦でつぶれているのだから。

しかし、この女は情に厚いのかわしの目や傷を見て目を潤ませていた。確かに幼子がこんな目に遭っていたら尋常ではないだろう。

ここでふと考えた。

このまま幼子であればここで面倒をみてもらえるのではないだろうか。

ここはどうも異世界らしいし、帰る手だてが今はない。もうしばらく今のままで様子を見よう。

そうすることにしてその晩から「門田 カオリ」の元でしばらく暮らすことにした。

次の朝早くに目を覚ますとなにやら向こうの部屋から気配を感じた。幼子の姿だからかやたら眠い体にむち打ちながら足を運ぶと大きな部屋にでた。ここは道場だろうか。使い古されてこすれ上がった床板がそれを肯定している。

「カオリ」が道場の真ん中にいた。

白いきものに紺色の袴姿でなにか稽古をしている。その動きはなめらかで、舞を舞っているようにも思えた。ほのかに朝日に照らされる舞台上で舞ううつくしい女^{ひと}。
今までこんなうつくしい女をみたことがあっただろうか。

わしは魂を捕まれたようにその場から離れることさえできなかった。

雨だれのおと

2月の割に暖かい日が続いていたが夜になると、しとしとと雨が降ってきた。

ジイ様の葬儀を済ませて3日ほど過ぎた夜だった。

相変わらずヒスイの引き取り手はなかったがヒロやミチ、トモの3兄弟に囲まれると一人くらい増えてもなんら違和感が無かった。その日はサトの夫の明人が出張から帰ってくるのもう休ませたくないヒロの幼稚園の為にサト親子は800メートル先の彼らの愛の巣へと帰っていった。

…しずかだ。

先ほどまで3兄弟が居たとは思えないほどの静寂な空間で私はヒスイと二人夕飯を食べていた。

ヒスイは器用に箸を使い、食べる。その姿は5歳ほどというのに凛として美しく風格すら感じる。

「おかわりはいるか？」

私の言葉を聞くとヒスイは急いで茶碗に残ったご飯を平らげてお椀を渡す。その様は子犬のようで非常にかわいらしい。

「慌てなくていい。おいしいか？」

ヒスイはもぐもぐイモの煮物を口に含みながら大きく頷いた。

サトに言わせると「茶色の食卓」と言われる私の作る料理（…老人が好みそうな和食の煮物ばかりという食事の事らしい）でもヒスイはもりもりよく食べた。もうジイ様も居ないのだからもう少しかわいらしい食事も作ってやった方がいいのだろうか。来たときからヒ

スイはよく食べる。しかも、初めて…という食べ物ほとんどだ。いったい今まで何を食べていたのか…。いかん、またしんみりしてしまった。

はじめは風呂嫌いなんだと思っていたヒスイだがどうも大人と一緒ににはいるのが嫌だとわかった。脱衣所で待機し、服のまま入って体だけ洗ってやることにした。なにか彼なりにトラウマがあるかもしれないとサトと相談した結果だった。

「カオリ殿。文字を教えてもらいたいのだが…。」

「わしは24歳だ」と言い張るヒスイにサトが意地悪して文字を書かせて、（もちろんミミズの這うようなものだった）ヒロの方が上手いと言った。傷ついたのか意地になっっているのかそれからヒスイは暇があれば字の練習をしている。サトも大人げない。

「カオでいい。ヒロもそう呼ぶだろう？」

いやいや、ヒロは「おやかたさま」か。言ってから気づいたがヒスイが小さな声で「カオ」とつぶやいていたので良しとしよう。

「随分上達したな。」

ヒスイはめきめきと字が上手くなった。ヒロも負けじと争うように練習しているがまだ「さ」「や」「ら」が裏返ったり反対になったりしている。ヒスイは子供らしくない。強いて言えば食べているときくらいしか相応な感じがしない。なんだか急いで大人になろうとしているみたいに見えていて切ない。夜もヒロやミチがサトの隣を争って寝ている（片方はトモの指定席なのだ）というのに「一人でねれる」と離れて寝ていた。

一通りひらがなを教えてやるともう8時になっていた。風呂にも入ったのでヒスイには歯磨きして寝るように言う。まだやると相当渋ったのだが、幼児には睡眠が必要だ。明日からは道場も再開するので書道と合気道を習わずと約束して布団に入らせた。

台所を片付けて早々に私も眠ることにした。

ふと気配がして身を起こした。

「カオ……。」

「ヒスイか。どうした？トイレか？」

隣の布団で寝ていたヒスイが起きたようだ。

この家のトイレは屋外にあるために夜中に行くとすると幼児には大変な冒険となるからな。

暗がりからヒスイが私の顔をのぞき込む。電気のスイッチの場所が分からなかったのだろうか…。

「あっちから変な音がする。」

「…ふむ。」

怖い夢でも見たのだろうか。取り敢えず安心させるためにも見えてき

てやるっ。

そう思って廊下に出た。後ろからヒスイがついてくる。

カタッ…

誰か居る。

ダンッ！

音がするよくにわざと空いていた戸を全開した。黒い覆面をした男がジイ様の祭壇辺りにいてこちらを見て驚いているようだった。すぐさま慌てた男はこちらに向かってきた。出口は私の背中側だからな。

左側から飛びかかってきた男をかわしながら手首を軽く引いてやった。

ドスン！

空中で一回転してから男が倒れた。腕をひねって関節技をかける。

カラン…。

音と共に果物ナイフが落ちた。昼間サトがしまい忘れていたのであるっ。後で説教だな。

男が動けなくなったところで…。思い出した！後ろにヒスイが！

「…すまない。忘れていた。大丈夫か？ヒスイ。」

すっかり小さな同居人のことを忘れていた…。これじゃあサトに説教どころではない。冷や汗をかきながら後ろを向くと…。

尊敬の眼差しで見つめるヒスイがいた。

…取り敢えず警察を呼ぼう。

「お葬式後は狙われやすいんですよ。雨の日も…。でも、師範の家に入るとは泥棒も気の毒でしたね。」

中年の里山という恰幅のいい警察官が言う。出稽古の時に会ったと言われたが私は覚えていなかった。

泥棒は50歳くらいの男だった。隣町で窃盗を繰り返していたらしい。

…4時か。一通り見聞も終わり、ひと眠りできそつだ。

「ヒスイ、寝よう。」

「さきほどの技はなんだ？」

窃盗犯を捕まえた後、ヒスイが私にくつついて離れなかった。初めは怖かったのかと思ったのだが、どうも私のつけた技に興味を持ったようでキラキラした顔で見つめてくる。

…上気した頬がかわいいな、ヒスイ。しかし、私は眠いのだよ。夜が明けたら10時から主婦対象の健康と護身クラスがあるし、午後からは年少の部、夕方には門下生が集まってくる一般クラスがあるのだ。

今日はハードな一日なのだから、寝よう。お願いだから寝てくれ。

「ヒスイにもいずれ教えてやるから兎に角寝よう。」

そう、諭してヒスイの背中に手をやるとドンドンと戸を叩くものが居る。

「師範！如月です！大丈夫ですか！？」

……。うるさいのが来た…。

「大丈夫だからそのまま帰れ！」

「イヤです！師範の顔を見るまで帰りません！開けてください！」

……。

「開けてくれなきゃ、ここで愛を叫びます！」

……。

「僕は師範をあ…」

ガラ！

ドンッ！

ドシン！

うっとうしいので戸を開けてのどを突いて倒してやった。毎回毎回、近所迷惑なやつめ！

戸の外で伸びているやつを一瞥して戸を閉める。

ピシヤ！

……。

振り向くとまたもや小さな同居人が私を見ている。教育上悪いではないか！あいつめ！

「…今の技は…」

「だ・か・ら。寝るのだ！」

ヒスイにぴしゃりと言いながら小さな手を引いて寝室までヒスイを連れて行った。

それからヒスイは黙って布団に入った。…が、眠れないようでパツチリ目が開いたままだった。

なんだか色々ありすぎて疲れているのに眠れん。はああ。

「…ヒスイ。眠れないか？」

「…努力する。」

「絵本でも読んでやろうか？」

「……………」

ヒスイが体を起こしてこちらをみて頷いた。
確かこの辺に…。

ジイ様がヒロに買ってやっていた日本のおとぎ話を出してくる。ヒロのお気に入り「龍の子太郎」をよんでやろう。胡座を組んでヒスイを足の上に座らせる。少し抵抗する気配もあったが、案外すんなり座った。抱え込むように腕を伸ばしてヒスイの前に絵本を広げてやった。

母を知らずにはあさまと暮らしていた太郎が龍である母に会う為に旅をしながら母の元に行き、母と共に村を救う話だ。結構大人でも感動する話で、ヒロに何回も繰り返し読んで読んだためにそのページだけぼろぼろになっている。

「この世界にも龍はいるのか？」

読み終わるとヒスイが言った。「この世界には、」
「だろっ？…」
「ちょっと苦笑して答えてやる。」

「見た人はいないけれど、いるかもしれないな。」

互いの体温で暖まったせいしか眠くなって、そのまま私はヒスイを抱えて朝まで眠った。

エプロンをした男

朝目覚めると腕の中にヒスイがいた。

深く眠っているようなのでそつと腕を外して布団に寝かせた。朝ご飯の用意をしなければ。

今日からジョギングも再開しようと思っていたのだが…。明日からにしよう。

…台所から味噌汁のにおいがする。

…

不覚にもヒスイと一緒に深く眠ってしまっていたようだ。

「不法侵入だぞ、如月。」

台所の梁にもたれながらエプロン姿の男を見る。懲りないやつだ。ビクリと肩を震わせて如月が振り向く。

「師範！ おはようございますー！」

「そこで何してるんだ。」

「なにして！朝ごはんの仕度です！僕の愛をこめ・て（ハート）」

「今度はサトに何を買いで鍵をもらったんだ？大体なんだ、その凄まじい色のエプロンは…。」

いい大人の男がショッキングピンクのハート&レースのエプロン。どの面下げて買いにいけるのだ。…幼馴染のこの男の趣味は今だから理解できない。いや、したいと思ったこともない。しかも気を許すとすぐにタメ口をきく。

「ひどいなあ。泥棒が入ったって言うから代わりに様子見に行くって借りてきただけだよ。」

…てつきり私は不法侵入者はお前だと思っていたがね。おかげでヒスイのことも忘れて思いつきり戸を開けてしまったではないか。無事に済んだからいいようなもの…。

「直ちに朝飯の用意を中止し、家に帰れ。」

「だ、大丈夫だよ！今日は！毎日練習してるから！」

「…すでに焦げ臭いのだが。」

「え！わああああ！」

フライパンの中で炭になっている物体に水をかける。

ジュワワワワワ〜

「お願いだから何もするなといったらるう?」

そう、何度も何度もな。上目使いしたって無駄だ。いくらお前がカワイ子ちゃんな顔でも男だからな。他で通用したって私には効かなかの策士であることも知っているしな。

「食材が気の毒だろう。それに、かろうじて出来たものを食べる者もさらに気の毒なのだ。」

「カオ…。」

声と共にジャージの裾が引っ張られる。

おっと、このままいけば気の毒な食事の被害者に加わってしまうヒスイが起きてきたようだ。

「おはよう、ヒスイ。顔を洗っておいで。」

「え、ちよ、ちよっと！聞いてないよ！カオリ！この子だれ?」

…。黙って睨んでやつを見る。

「お前には名前を呼ぶことを禁じたはずだが?それに、私はお前より年上なんだぞ。」

「…スイマセン、師範。で、だれです?こどもが居るなんて聞いてませんか?」

師範でなくとも門田もんでんで呼べばいいだろう。まったく反省していないな。

「わけあって面倒をみているんだ。お前には関係ない。」

「そんな、他人行儀な…。」

「他人だ。」

フライパンのこげを落とすように言って朝ごはんの用意を軌道修正。そうでなくてはヒスイが不憫だ。

味噌汁は残念ながら出来上がっていたのでせめて味見して味を直す。

「で、早く帰ってくれないか？」

トドメに言うと如月が涙目で訴える。

「朝ごはんぐらいは一緒にたべていいでしょ？僕、雨の中、カ…師範に倒されてたんだから！お願い！」

それにしてはこざっぱりした姿じゃないか。着替えて来たのか？茶色く染めた髪は少し濡れているようだ。

「…朝食だけだ。」

「わーい！愛してる！ンーア！」

投げキッスを空で掴んで踏みつけてやったら如月が「ひどい…」と saying it.

テーブルの上に3人分の食事が並ぶ。

「……いただきます。」

今日のご飯が普通に炊けているだけマシだった。前来た時は粥になっていた。炊飯器のメモリは何のためについていると思っただのか。洗剤でコメを洗ったので変にレモンな臭いだったし、炊飯ジャーの水蒸気が出るところからも粥があふれ出て台所も大変なことになっていた。

…味噌汁の中でどろどろになったヤケに長いワカメを箸で掴んで悪戦苦闘しているヒスイが見えた。嫌がらせでしかないだろう。進歩したのは余計なものが入っていないことだ。…前はチョコレートが入っていた。「バレンタインだから…」と、言っていた。まだ生きていたジイ様もその日はおかわりしないで終始無言で食べていた。なんだ、その理由は。私の胃への挑戦か。いや、実際は我慢の限界への挑戦だ。これもヤツの兵法なのだ。平常心。平常心。

「ヒスイ、焦げたところは避けていいぞ。」

黙々と食べるヒスイに声をかける。出されたものは綺麗に食べるヒスイには負担が大きいかもしれない。シシャモの頭が炭に近い…。どうして片面しか焼かんのだ。

「ね、ね、こつやつてると僕たち家族みたいだよね！」

上機嫌の如月が言う。嫌な予感がする。

ふと部屋の隅にあるポストンバックが目に入った…。まさか。

「朝食を食べたらここから出て行くんだよな？」

「……。」

如月の目が泳ぐ。すると、がばりと私に向き直った如月が額を畳にこすり付ける。

「お、女の子の一人暮らしは無用心だよ！だから、今日から一緒に住もうかなって！お願い！」

何故に朝から土下座されているのだ私は…。

「駄目に決まっているだろう。」

「これが僕の本気です！」

「バサッ！！！！」

「勝訴」な感じでヤツが見せる書類…。

「ビリッ！」

「クシャッ！」

「ポイツ！」

奪って破って屑箱に捨ててやった。婚姻届を何枚書けば気が済むのだ！

「……………」

後ろでヒスイが目を丸くしている…。うっ、教育に…。

「如月カオリが駄目なら門田幸太郎でもいい！僕をカオリの嫁に！
！！！」

何故に私が嫁を貰わねばならんだ。それをいうなら「お婿」だろ
う。

「いい加減にしろ。出入り禁止にするぞ。」

とたんにシユンとなる如月。うなだれても知らん。甘い顔して今ま
でいいことなどないからな。

「カオちゃん！泥棒入ったって？」

そうこうしているうちにヒロを幼稚園に送ってきたサトが顔を出し
た。左手にはミチ、胸のオンブひもの中にはトモがいる。

「ゲツ、幸太郎！あんたここで何してんのよ？マンションにいない
から変だと思った！鍵返せ！」

「サト、何かあるうとこいつに鍵を渡すな。」

「ごめん！でも夜中に子供連れていけなかったし……。心配だったん
だ。」

「…………。大丈夫だったよ。」

「あれ？幸太郎なに寝てるの？」

サトのがそう言ったので振り返る。如月が赤い顔して倒れていた。

次から次へと…。

わたしも修行が足りないらしい。

エプロンをした男（後書き）

変な人出てきました。

秘密をもつ男

幸太郎が倒れた。

人のいいカオちゃんは幸太郎をお布団に寝かせてしまう。

…まあ、ここで見捨てたら人でなしだけど。

幸太郎の数々の行いを脳裏に浮かべるとこれも「作戦」じゃないかと疑ってしまう。

一途なんだか、なんなんだか。

昔からカオちゃんの周りには何だかんだと心に傷をもった人が集まる。きつとカオちゃんが優しいから集まってしまっくんじゃないかと思う。妹の私から鼻屑目なしに見てもカオちゃんは優しい。そしていつも自分を犠牲にしてしまう。ジイ様が倒れなかったらこの村に留まらず「合気」の道をもっと極めていただろうし、きつと今だって私が遺産をわけてって言えば迷わずここを売ってしまうだろう。あの「伯父」にだって渡してしまうかもしれない。…きつとカオちゃんは両親が亡くなってから私を守るために多くのものを犠牲にしてきたに違いない。私が寂しいときは母に、私が悪いことしたら父に、優しく、時に厳しくカオちゃんはたった8歳の頃から二役して私を守ってきた。

幸太郎は飯塚病院の相談役の息子だ。都会の本邸から離れてここで暮らしている。どうしてかというとまあ、要するに「愛人」の子だからだ。小学3年生でこっちに引っ越してきた幸太郎はカナリやさぐれていた。酷いじめにあって引っ越してきたという噂もあったが私の見解では幸太郎の生活がすすんでいた為ではないかと思う。見た目は女の子と間違われるほど華奢でかわいい幸太郎は背もあまり高くはないので本当に「可愛い」に尽きる。幸太郎の母親が心配

してうちの道場に通わせたほどよく変態さんなんかに声をかけられたそう。道場に通いだしてから幸太郎は変わり、カオちゃんを追いかけるようになった。

長いこと他の子と同じように「自分」みたいな感じでくつついているのだと思っていたが、どうやら幸太郎だけは違っていた。同級だった私もその王子様のような外見に騙されていたくちだが、カオちゃんにはお見通しだったようでカオちゃんの幸太郎に対する態度は初めから変わる事はなかった。その平等さこそが幸太郎が渴望していたものなのかもしれない。

あゝあ。あれで「腹黒」でなければなあ。私だって応援してやら無いでもないのに。

高校生のときから女遊びは派手だったが（本人はカオちゃんをリードするための修行って言うてた…何がだよ！）大学を卒業し、国家試験にも通り、晴れて薬剤師となって村に帰ってきた幸太郎は思い余ったのか気でもふれたのかジイ様が老人会の旅行で一泊空けた日にカオちゃんに夜這いをかけて返り討ちにあい、寝ボケて手加減できなかつたカオちゃんに全治2週間の怪我を負わされた。もちろん幸太郎も素人ではないので受身で逃げたはずだが、本人も相当切羽詰っていたのだろう。

怪我をさせたので謝りに行ったカオちゃんに（私はほつとけつて言ったんだけど…）幸太郎のお母さんが土下座して謝ったのは訴えなかつたカオちゃんに対して当然のことだったと思う。…もちろんボツ〇ガの財布に釣られて鍵を渡してしまった私はカオちゃんに大目玉くらったけどね。

あゝあ。カオちゃんにいい人いかなあゝ。

正直カオちゃんはもてるよ？婿養子でもって人も過去2、3人はいたし、ジイさまに直談判した人もいた。でも、なぜか本人に猛アタックした人（それとなくじゃカオちゃんが気付くわけないし）はいなくて、ほら、あの「腹黒」幸太郎がみくんな縁談はつぶしちゃうから、そんじよそこの男では…。そうは言ってもカオちゃんだって27歳…いまさら幸太郎にはやりたくないしなあ。

「サト、聞いているのか？」

「え？なに？カオちゃん。」

おっと、考え込んだ。目の前のカオちゃんが眉を寄せている。

「だから…。」

カオちゃんがヒスイのほうを見て声を潜める。ヒスイは幸太郎を寝かせている部屋に「冷却シート」をもっていこうとしている。カオちゃんが頼んだようだ。

「このままヒスイの引き取り手が現れなかったらどうすればいいと思う？」

「連絡無いもんねえ。」

このまま一緒にいれば確実にカオちゃんの情が移ってしまうだろう。かといって独身のカオちゃんがヒスイを育てていくというのは現実味が無い。犬猫ではなく、人間の子供なのだ。

幸太郎に相談したら「僕と結婚して引き取りましょう」とか言いそうだな。

こういうときに頼りになる人って…。

「蔵田先生に相談してはどうかと思ってな。」

蔵田？くらた…くらた…誰だっけ。

「弁護士の先生だよ、サト。」

ああ、あの眼鏡のイケメン…。！そっいや、あの人独身かな？いいかも…！！

「それがいいよ！すぐに電話してみよう！善は急げ！だよ！」

「なんの「善」だ…。まったく。後で電話する。」

そっいいながらカオちゃんは蔵田弁護士の名刺をジイ様の写真の前に置いた。

昼過ぎにカオちゃんが電話すると蔵田先生は明日来てくれると言っ
たらしい。ちょっとした相談で来るなんておかしいんじゃない？こ
れは、脈ありなのかも…。

「まだ保護者が現れる可能性がありますから。カオリさんが面倒見

切れないようであれば施設を探しましょう。」

「いや、ヒスイは虐待されていた可能性がありますから施設選びは慎重にしたいのです。ここに来たのも何かの縁でしょう。面倒を見るのはかまわないのでヒスイに最善になるように考えたいです。」

「……。それでしたら施設や里親のことを調べるのに時間をかけて、保護者が現れないようでしたら戸籍を作ってあげたほうがいいかもしれませんね。今のうちから村長さんに相談しておきましょう。あなたは独身ですし保護者にはなれないでしょうしね。」

「……。じつと蔵田弁護士を見つめる私とトモ。ま、トモは見たこと無い人を認識してる最中だろうけど。ノンフレームの眼鏡が似合うインテリ……。コートはマツ○ントツシュか。趣味いいな。笑いジワが優しそうな人だ。いいんじゃない？」

「先生は独身なんですか？」

「は？ええ、まあ。」

「……サト。」

やた！カオちゃんの声が怖いけど、ここは妹として頑張らねば。

「恋人は？ちなみにカオちゃんも恋人なしです。」

「サト！すいません。気にしないで下さい。」

イテッ！カオちゃんに太ももつねられちゃった！でも、ほら、蔵田さんだつてまんざらじゃないみたいなんだもん。

「カオリさんは素敵な人ですね。実は大先生おおせんせいにも勧められたのですよ、「うちのカオリをどうか」って。」

「ええ！！カオちゃん、ジイ様公認だつて！」

「……………サト……………」

「いえ、サトリさん。私のようなものが結婚など。ましてカオリさんのような方とは交際なんてとんでもないです。ですが、大先生おおせんせいにはご恩があります。困ったことがあれば何でもご相談ください。駆けつけますから。」

そういつて蔵田弁護士はにっこり笑った。それはとても冷えた笑い顔だった。

「助かります。ヒスイのことよろしくお願いいたします。」

カオちゃんが両手を突いて頭を下げた。あわてて私も頭を下げる。もちろん、私だつてヒスイのことをないがしろにする気は無いからね。

蔵田先生が帰ってからそれとなくカオちゃんにチェックを入れる。

「ね、蔵田先生って素敵よね〜！」

「……………」

あれ、反応なしか……………。

「蔵田ってダレ…。男の声が聞こえてたんだけど…。」

「ギャ〜っ！幸太郎！ゾンビみたいにないでよ！熱下がってないんでしょ！おとなしく寝ときなよ！起きれるんだっいたらマンションに帰れ！」

帰れといわれて匍匐前進ほふくぜんしんしてきていた幸太郎がゴホゴホとあからさまに咳をして隣の部屋に後退する。かわいい顔も真つ青なくらい鼻水が垂れてる…。どうでもいいけどカオちゃんの幸せを邪魔するなよ！

「幸太郎、あまり出歩くな。明後日には病院の勤務が入っているのだから？早く病気を治せ。」

おかゆを持ったカオちゃんがやってくる。幸太郎め、にやけおつて。

「ヒスイ。文字の練習もいいが、もう少し目を離しなさい。目が悪くなる。」

机で文字の練習をしていたヒスイがカオちゃんの声を聞いて顔を上げる。なんか、あの子、場の空気読みすぎじゃないかな。つらい経験をしていたとしてもあんなに知能があがってついてくるものなのかな…。最近漢字を覚えてるらしい。ヒロが特別おバカな子でないのだからヒスイの頭が良すぎるのか。う〜ん。なんか話しても視線が一緒なのよね。天才児かしら。

「あ、ヒロを迎えに行かなきゃ！カオちゃん、ミチとトモお願いね！」

ちやうど眠ってしまった二人を置いてヒロの幼稚園へ。カオちゃん

はヒスイも幼稚園に通わせたいと思ってるみたい。4月には年長さ
んだもんね。

ヒスイ。不思議な子。

ふふ、あの子が大人になったらカオちゃんにぴったりなのに。合気
にも興味があるし、なによりあの二人は熟年夫婦みたいに雰囲気
ぴったりなのだ。まあ、考えるだけ無駄だけど。

「ヒロ〜！」

制服姿で砂場で恐ろしいくらい必死に穴を掘っている息子を呼ぶ。
なにが楽しいのか奇声を上げながら喜び合う子供たち。

「なに作ってるの？」

「チョコレートだよ！おかあさんたべる？」

水を混ぜなきゃ考えてやってもいいけど…。なんで髪の毛まで砂だ
らけかな。

「ちょっとだけならね。」

「わかった！もってくる！」

あゝあ。こないだ洗ったばかりなのにもうズボンの後ろがドロドロ
だ。いつも思うけどなんでヒロの制服って洗おうと水につけると恐
ろしい色の水になるんだろうな。幼稚園児の不思議のひとつだ。
お皿に泥をやまもり積み上げたヒロが走ってくる。

「ヒロくんのおかさん」「ヒーのむ？」

「ん？」

泥水の入ったコップを持つヒロのお友達ミイちゃん…。

「おかさんのチョコレート！ケーキにしたよ！」

泥の物体を皿に乗せているヒロ…。

真っ白なはずの君たちの靴下は今日も茶色に染め上げられている。

秘密をもつ男（後書き）

しばらく更新できません。すいません。詳しくは活動報告にて。

カオリの葛藤

蔵田弁護士。

以前ジイ様が縁談の話を持ってきた人物だ。彼は自分を偽って生きている。無論、私としては自分で言っただが「愛」のない婚姻はするつもりはない。共同生活の相手は私には必要ないと思っているからだ。いずれ私はここを離れて「合気」の道を究めるために放浪するつもりである。九州の同志には前々から誘って貰っているし、全国を行脚するのも悪くない。少々歳も食ってしまったが、なに、何歳になろうと志しあれば何とかなるのだ。サトの3人の子供の手がいらなくなったら、ヒスイの件がうまくいったら…サトはぎゃあぎゃあ言っただろうが身一つで出て行く事を心に決めている。

「それじゃあ、これで。」

「よろしく頼みます。それと、これを。」

「…いつもありがとうございます。」

「遠慮なく。」

蔵田先生を見送り、いつもの紙袋を渡す。サトには内緒だが私たちは月に1度は街で会っているのだ。しかし、それは「この」蔵田先生ではない。それに彼の心根はとても優しい人なのですぐに私たちは打ち解け、今では大親友なのだ。両親に厳格に育てられた故に歪んでしまった本当の彼はジイ様に出会って開花したのであるう。「おおせんせい大先生が本当の自分を受け入れてくれて人生に光がさした。」彼はジイ様の話になるとそう言う。ジイ様の褒められたものでない「夜

遊び」で唯一、人の役に立った出来事に違いない。

数日経って村長から連絡があった。「ヒスイ」に一度会いたいとの事だった。

その日はサトが選んだ「賢そうに見える服」をヒスイに着せた。黒い金属製の眼帯は目立つので医療用の眼帯に変えてやった。ヒスイは終始何も言わず私がすることに無言で従う。サトと話合って、ヒスイが「捨てられる」ような錯覚を起こさないように細心の注意を払い、回りくどいことはせずに正直に話すことにした。

「このままヒスイがこの家で暮らすには色々と手続きがあるんだ。その為に村で一番偉い人に会いに行くんだよ。それに…私と暮らすよりヒスイにとって良いところが有ればそちらに行けばいい。」

歩きながら二人で行く道の途中、そう、ヒスイに言った。つないだヒスイの手に「ギュッ」と力がこもった。それは一瞬だったが、私には心臓を掴まれたような感覚だった。少し歩いてヒスイが立ち止まる。顔を上げるとまっすぐに私を見て言った。

「カオはわしが居ると迷惑か？」

迷う素振りもないまま首を横に振り、答えてやる。

「ヒスイが居たいならずっと居てもいい。」

「…そうか。」

「心配するな。今日は顔を見せるだけだ。」

微笑んで言うヒスイもにこりと笑った。子供は笑顔に限る。

「こうして二人で歩いていると親子のようだな。」

そう言うとヒスイが固まった。母親のイメージをさせることは禁句だったろうか。「顔も覚えていない」と言っていたのだが。私では理想の母親像を壊してしまうのだろうか。不味いことをいったか……。悶々と考え込んだ私を横目にヒスイはぼそりと

「カオを母と思ったことはない。」

と言った。色々世話を焼いてやっていた手前その言葉はショックだったが致し方ない。少し落胆した様子を感じ取ったのかヒスイは村長の家に着くまで握った手に力を入れてつないでいた。

「賢そうな子だね。」

村長の家に着くとすぐに応接室へと案内された。

村長は少し小太りの誰がどの角度から見ても温厚で人の良いおじさんだ。自慢のひげの手入れを欠かさないらしいが道場の子供たちには「カー〇おじさん」と呼ばれている。

「はい、賢い子です。」

なぜか自慢げに答えてしまった自分に苦笑する。

「ヒスイくん、あつちの部屋であのお姉さんと遊んでおいで。おじさんとカオリちゃんはお話があるから。」

ジイ様を慕っていた村長は今でも私をカオリちゃんと呼ぶ。私が頷いてそうするように促すとヒスイがこちらを伺いながら遠慮がちに村長の娘さんについて行った。ボタンと扉が閉まるのを見届けてから村長が話し出す。

「戸籍の話は蔵田弁護士から聞いているんだがね。それとあわせて話があるんだよ。」

「話…ですか。」

「実は3ヶ月前にこの村に越してきた村田さんという40代の夫婦が居るんだが、2年前にお子さんを亡くされていてね。生きていればヒスイくんと同じ歳の頃らしい。先日たまたま飲みに行った時に旦那さんと会ってヒスイくんの話したら興味をもって是非会いたいと言っているんだ。カオリちゃんはまだ独身だし、ヒスイくにとつても悪くない話じゃないかと思って。」

「ヒスイを引き取るってことですか。」

「もちろん、会って見ないと分からないと思うよ？お互いの相性も有るだろうし。」

「…そうですね。」

答える私の声が少しだけ震えた。

頭の中では分かっていたことなのに何故だかしっくりこなかった。

突然の村長の申し出は上手くいけばヒスイにとって良いものにちがいない。でも、私は村長にそう答えるだけで精一杯だった。

「また近々連絡するよ。じゃあね、カオリちゃん、ヒスイくん。」

にこやかに手を振る村長に軽くお辞儀して門を出た。

信号の前で教えられた通りにヒスイが私の手を握ってきた。

軽く握り返して私は気がつく。

ジイ様が亡くなってからあの家の中で寂しく感じなかったのはこの小さな存在があつてのことだったのではないか。現に私は「ヒスイ」を手放したくないと感じている。今、繋いだこの小さな手が愛しい。武道の話となると目を輝かせて饒舌になるおかしなヒスイ。例え焦げていようとも出されたものは綺麗に食べるヒスイ。膝の中で絵本を見ながら眠ってしまうヒスイ…。

…この子の未来のためには両親が揃っていたほうが良いだろう。まだそうとも決まっていけないし、考えても仕方ない…だが、そのときは笑って送り出してやらねばならない。村長の話ではとても感じの良い夫婦らしいし。

…今のうちに覚悟はしておこう。

ヒスイに私の寂しさを悟られぬように。

数日過ぎた日曜日に早速夫婦から会いたいと連絡が入った。

既に覚悟していただけにすんなり了承して再び村長の家で会うこととなった。何も知らないヒスイをまた連れて行く。見合いのようにテーブルに対面した村田夫婦は少し年齢より老けて見えた。香水の匂いが鼻につく少女趣味なピンクのスーツを着た奥さんは涙を浮かべて机越しのヒスイの手を握った。

「なんてかわいい子なのかしら。」

隣で休日ゴルフのような格好をした旦那さんが頷く。ニコニコとする一見人の良さそうな夫婦に…なぜか気に入らない感じがした。

「どうだい？カオリちゃん。なかなか良い感じじゃないか？」

村長が私に満足げに言った。そうなのだろうか。なんだか私は気に食わない。

「試しに家に遊びに来てください。」

奥さんが軽く目頭をハンカチで押さえながら私にそう言った。…ヒスイはどう感じているのだろう。隣のヒスイを見ると不安そうに私を仰ぎ見ていた。軽くヒスイの頭を撫でてやって、「ヒスイと相談します。」と夫婦に笑顔を向けた。その場はそれで別れて、家に帰ってからサトにも相談した。

「うん。村長さんの勧めだったら悪くない気もするなあ。変な施設に入れるよりヒスイにはいいかもねえ。」

サトはそんなことを言った。

「ちょっと嫌な予感がしたんだ。」

「…。普通ならカオちゃんの「勘」を信じるところだけど、カオちゃんにはヒスイのこと気に入ってるでしょ？」

「…確かに。」

「それに、このまま一緒に居たいでしょ？そういう気持ちで見てたらどんな人が引き取りにきても取られちゃう気がして嫌な感じすると思うよ？」

「……………」

「それに私はいつでも会える村の人に引き取ってもらうほうが理想的だと思うけど。ヒスイはカオちゃんに「お母さん」を求めているかな…。」

「サトは痛いところを突くな。ヒスイには「母」思ったことはない」と言われたよ。」

「…ヒスイが気に入ったらそうするしかないかもね。」

その言葉には私は答えなかった。そうするしかないだろう。明日、ヒスイを一人で遊びに行かせよう。

お互いに気に入ったら…。

…そのときは潔く送りだしてやろう。

そうは心に決めたものの

ヒスイはあっさり村田家に遊びに行くと言い、次の日に遊びに行つて帰ってくると「村田さんの家に行く」と言い出した。

それを聞いた私は…

モヤモヤした気持ちをどうすることも出来ずに「そうか。」とぶっきらぼうに言うことしか出来なかった。

カオリの葛藤（後書き）

次回は翡翠の視点の予定です。

翡翠の選択

「カオリ殿。文字を教えてもらいたいのだが…。」

こちらの世界に来てから随分月日がたったというのに帰り方を見つけることも元の姿に戻る方法もわからないままだった。「実はわしは24歳で…。」と、本当のことを話して協力を求めようとしたが、誰も聞く耳もちそうにも無かった。このなりでは仕方ないのだが…。

それでも少しだけ分かったことがある。わしのいた世界では文字の力によって空間を移動するのだがその力が使えそうであるということだ。サトリに「24歳なら字でも書いてごらん？」と言われ、わしの知っている文字（もちろんわしの母国語だ）を紙に書いたのだがそれでは文字に宿る力は発動しなかった。しかし見よう見まねで書いたこちらの文字では少しだけだが力の発動を感じられた。この世界の文字に宿る力を理解できたら帰れるかもしれん。兎に角、今は覚える事に集中しよう。

「カオでいい。ヒロもそう呼ぶだろう？」

カオリはわしにそう言った。カオリは根気よく教えてくれる。間違えても落ち着いて考えさせ、上手くできたときだけ褒める。勉強は苦手なわしにとってはまたとない良い教師に思えた。

小さな声で「カオ」とつぶやいてみる。なんだかこそばゆい感じが親近感が沸く。いい響きだ。

「随分上達したな。」

カオがわしを褒める。カオが教えるのが上手いのだ。そうは思っても声にはださない。なに、5歳の子供がそんなことを言うのはおかしいだろう。もう少し勉強したかったが「寝るのも子供の仕事だ」と言っただけ毎日同じ時間には床に連れて行かれた。

カオの隣に寝床を与えられていたので一人で床に入る。時々カオは夜中にわしの様子を見るので寝ていなければならなかった。この近い空間では起きているとカオに気取られる心配があった。

…一緒に出てきた琥珀は無事なんだろうか。奴もこちらの世界に来ているのだろうか。

そんなことを考えながら何度か寝返りを打った。ようやく瞼が落ちてきた頃に気配を感じて起き上がった。廊下の向こう側から音がする。物取りだろうか。

どうしようか考えたが、幼子の姿で立ち向かえるはずも無く、取りあえずはカオが危ない目に遭ってはいけないとカオを起こすことにした。

わしがカオの枕元に経つとカオはすぐに目を覚ました。

「カオ……。」

「ヒスイか。どうした？ トイレか？」

「あつちから変な音がする。」

「…ふむ。」

注意を促したつもりがカオは廊下にでてしまった。こんなつもりで

はなかった。そう思いながら仕方なくカオの後ろについていった。
何かあったらカオを何としても守らなければ。

カタツ…

微かに音がした。するとカオは何を思ったのか大きな音を立てて襖を開いた。

ダンツ！

ドスン！

全身真っ黒な男が空中で一回転するのをただ、わしはカオの後ろで見ていた。腕には銀色に光る刃物がある。カオは素早く腕をひねって関節技をかけてその手から刃物を落とさせる。

カラン…。

その音でびくりと体が揺れた。体が熱くなるのが感じられる。
流れるような動作。美しく隙のない…。

目の前にいるのは何者なんだ？

心臓の音がうるさい。

カオから目が離せない。

「…すまない。忘れていた。大丈夫か？ヒスイ。」

気遣うカオのその声さえわしの感覚をすべてもっていってしまおう。わしは体中の血が沸きあがるような興奮を覚えた。

その後黒ずくめの男が役人に連れて行かれるのを見届けてから技の名前だけでも教えてもらおうと奮闘したが、カオにやんわり断られた。「ヒスイにもいずれ教えてやるから兎に角寝よう。」とそれ以上取り合ってもらえない。今日はもう無理かと諦めて部屋に戻ろうとした時にドンドンと戸を叩く音がした。

「師範！如月です！大丈夫ですか！？」

カオはその人物を邪険に扱うと一撃で倒してしまった。

「…今の技は…」

「だ・か・ら。寝るのだ！」

訊ねるもびしゃりと言いつめられてしまった。仕方無しに部屋に戻る。だが、寢床に横になっても興奮して眠れる状態ではなかった。

「…ヒスイ。眠れないか？」

カオが心配そうに尋ねる。カオも眠らなくては困るだろう。わしは寝る事でしか協力できないので

「…努力する。」

としかいえん。

「絵本でも読んでやろうか？」

「……。」

その言葉には非常に魅力があった。このままでは眠れそうも無い。

体を起こしてカオを見て頷く。

カオが胡座を組んでわしをよくに促した。少し気が引けたがここで拒んではおかしいだろう。きっとサトリの子にするようにしているに違いない。

カオが読んでくれた絵本は「龍神」の出てくる話だった。わしの国の神も龍だ。

「この世界にも龍はいるのか？」

そう質問するとカオはちよつと笑って

「見た人はいないけれど、いるかもしれないな。」

そう言った。

わしはカオの体温の気持ち良さに意識がとろとろして、迂闊にもそのまま眠ってしまった。

いい匂いがする。

カオの匂いだ。

記憶のある限りで一番安らいだ眠りがわしの体を包んでいた。

「如月」とカオが呼ぶ男は朝の炊事場に居た。派手な桃色の前掛けをしている。

色の白い女のような顔で髪が茶色い。少年のような雰囲気のある男だ。何かとカオにまわり付いている。カオは気付いていないが隙あらばカオの体に触れようとしている。

…なんだか感じの悪い男だ。

上手くカオに取り入った如月と朝食を共にする。食べ物に罪は無い。しかしこの男の作った料理と比べると今まで当然の様に食べていたカオの料理は遥かに上手いのだと悟った。カオはすごい。

「ね、ね、こうやってると僕たち家族みたいだよね！」

上機嫌の如月が言った。お前と家族になるつもりはない。

「朝食を食べたらここから出て行くだよね？」

カオも同じ意見のようだ。するとがばりとカオに土下座して如月はカオに家に置いてもらえる様懇願した。

「お、女の子の一人暮らしは無用心だよ！だから、今日から一緒に住もうかなって！お願い！」

妙齢の女の家に住むとは何を考えているのだ。しかし、如月は本気のように婚姻証のようなものをカオに差し出した。しかし、目にも留まらぬ速さでカオは破いて捨ててしまった。

「…………。」

そら見る、お前のような者とカオが釣り合うわけがなからう。しかし、次に如月はこう言った。

「如月カオリが駄目なら門田幸太郎でもいい！僕をカオリの嫁に！……！」

そうか、こちらの世界では男が嫁になる場合もあるのか。それならこの男にも可能性があってもおかしくない。そうこうしているうちにサトリが子供を連れてきて………図ったように男が熱で倒れた。

「如月はカオを好いて居るのか？」

突然現れた男の情報を集めるべくヒロに聞いてみる。

「こつたるつのこと？いつつもケツコンしてってカオちゃんにいつてるよ。」

「…………。」

「でも、だめ〜。こつたるつはハラグロでオンナにだらしなないからダメっておかあさんがいつてるもん。ヒロがおっきくなったらケツコンするんだ。」

「ミチも〜ミチもケツコンして〜！……！」

「ヒスイも？」

「え！？わ、わしは……。」

「みんな〜！おやつだよ。」

「はい。」

サトリの声で会話は途切れる。

わしはただ

……世話になっているカオが幸せになればそれでいい。

隣の部屋でうんうん唸る如月の元へ頭を冷やすものを持って行って欲しいとカオに頼まれる。男の癖に情けない。しかし、コレがこの男の作戦なら「腹黒」というのも領ける。

「ありがとう……。ヒスイくんって言ったよね？仲良くしようよ。」

横になりながら赤い顔をした如月がわしに言った。熱はあるようで額にカオに渡されたものを貼ってやると気持ち良さそうにした。

「……。」

「僕ねえ、カオリのこと大好きなんだ。君もカオリのこと大好き

だろ？いい。答えなくって良いよ……言わなくたって分るから。カオリが大好き同士仲良くしよう。で、相談んだけど、カオリは君の良い母親になると思わない？もちろん、僕がお父さん。カオリが結婚しないとヒスイくんをこの家にずっと住まわせてあげられないんだ。だから…僕がカオリと結婚できるように協力してくれないかな？」

「え…。」

カオは幼子の姿のわしに同情している。この家で引き取る事になればカオはわしの為にこの男と結婚するだろうか。

「もう一押しなんだ！嫌がってるみたいに見えただろうけど、テレ屋だけなんだ。絶対幸せにするから……。」

そう言われてもカオがこの男と結婚したいとは思えない。幼子を利しようとは不届きな奴だ。何か言ってやろうかと思ったが、薬が効いてきたのか如月は眠ってしまった。

サトリはカオの妹だ。カオも結婚して子供がいてもおかしくない歳だろう。わしがこのままここに居つけばカオの邪魔になるのかもしれん。いや、この男に利用されようとする地点でもう迷惑になっているのだろう。もう少ししたら帰れると理由もなく思ってきたが、この先、元の世界に戻れるとは限らない。カオは良い女子おんなだ。幼子の傷を見て泣く。そんなカオをこのまま利用して良い訳が無い。ここから出て行かねばなるまい。が、どうすればカオを悲しまずに出て行くことが出来るだろうか。

……そう悩んでいるわしに「養子」の話が来たのは実に渡りに船であった。

翡翠の選択（後書き）

お久しぶりです。の、割にはあまり話は進んでいません。すいませ
ん…（汗）

暗闇が身を包む（前書き）

＊＊児童虐待の表現が有ります。ご注意ください。

暗闇が身を包む

「このままヒスイがこの家で暮らすには色々と手続きがあるんだ。その為に村で一番偉い人に会いに行くんだよ。それに…私と暮らすよりヒスイにとって良いところが有ればそちらに行けばいい。」

今朝はサトリが持ってきた服を着せられて出かけることになった。歩きながら二人で行く道の途中、そう、カオが言う。

やはりわしがカオのところに居続けると色々大変なようだ。カオのところを出ようと思ったのにも関わらずカオから選べと言われると辛い。思わず握っていた手に力が籠ってしまった。いかん、カオを困らせてしまふ。しかし口からは縊るような言葉が思わず零れてしまった。

「カオはわしが居ると迷惑か？」

「ヒスイが居たいならずっと居てもいい。」

カオはすぐに答えてくれてにっこりと笑った。その笑顔がわしの心を暖かくしてくれる。

「…そうか。」

「心配するな。今日は顔を見せるだけだ。……こうして二人で歩いていると親子のようだな。」

先日の如月の言葉を思い出す。カオはわしの母親になる気であるのだろうか。

いや、わしの為にそんなことをしてはいかん。カオには幸せになつて欲しいのだ。

「カオを母と思ったことはない。」

わしはカオをあつ男から守りたい。これまでカオはわしによくしてくれた。素性もわからん子供を住まわせるだけでも大変だつただろう。きつとすぐにわしを放り出す事だつて出来たはずだ。異世界から来て、しかもこんな幼子の姿だが出来る限りのことは恩返ししたい。

自然とつないだ手に力が籠る。

それから村長だという温厚そうな男と対面した。その後の話し合いにわしは入れてもらえなかつたので何が話し合われたのかわからない。が、帰りのカオはぼんやりしていて気になった。危うく「信号」で先に行きそうになつたのを手を握つて止める。いつもは手を繋がないと渡つてはいけないとカオの方から繋いでくるのに。

軽く握り返されたその手のぬくもりを感じながら、ふと、わしが居なくなつたらカオも寂しく思つてくれるのだろうかと横顔を見上げた。

対面する机の向こうに40過ぎに見える夫婦が座ってわしをじっと観察している。

数日が過ぎてまた村長の家に連れられてきた。そうか。そういう事だったのか。この夫婦のところをわしを預けようと相談していたのか。これならカオが心配することもなくカオの家を出ることが出来る。

「なんてかわいい子なのかしら。」

きつい匂いもする婦人がわしにそう言いながら手を握ってきた。誰も尋ねもせぬうちにわしと同じくらいの子供を亡くしたと同情を誘っていた。

……わしは王の妾の子として育った。母のことは顔も知らない。父や異母兄はそれを気にする事もなくわしを扱ってくれた。が、周囲には恰好の利用できる者に映っていたようで内心はわしを見下しながら表面上は媚び諂う輩がいつも群がっていた。だから、分るのだ。目の前の夫婦がわしのことをどんな目で見ているのかを。

しかし、それもちよūd良い。本当に自分の子のように思って面倒を見て貰えば良心の呵責に苛まれる事だろう。…何れは自分の世界に帰る身なのだ。それまで衣食住を提供してもらえればいい。

二度目の夫婦の家に訪問した後、夫婦の家に行く事をカオに伝えた。

カオは一瞬黙ってわしを見据えると

「わかった。」

とだけ言った。これで良かったにも関わらず心のどこかで引きとめられるのでは無いかと期待していた自分に気付いて…

自分の身勝手さに嫌気がした。

「食べなさい。」

女がそう言っつて透明の入れ物のままの食べ物差し出す。冷たい食事。カオの味に慣れていたので全部甘く感じた。わしが食べているのを夫婦がじつと観察ながらコソコソと話をしている。

食べ終わるとケーキが出てきた。前にサトリが持ってきて食べた事があったがわしには苦手な食べ物だったので食べる前に断ろうと首をふった。

バチン！

目の前に星が飛ぶ。いきなり幼子の姿の自分が殴られるとは思わなかった。ので吃驚する。小さいこの体は今の平手で簡単に壁に打ち付けられて、頬はジンジンと熱を持った。

「食べる、糞ガキ。」

聞いた事の無い低い声で女が言った。

「逆らったら捨てて来るからな。犬のように食べるよ、ほら。」

足元にベシヤリとケーキを落として踏みつける。男は後ろでニヤニヤと煙をふかしていた。

どうやら思っていたより酷い状況だ。

「虐待を受けていたらしいからあんまり脅かすなよ。過呼吸でもなったら面倒だ。脅すならこれで充分。」

男はそういつてわしに近づいてきたと思うと

「いつ………!」

わしの掌に口に銜えていた煙を押し付けた。ジュウと肉が焼ける臭いと共に痛みが全身に走った。

「くくつ。怯えてる。怯えてる。」

「ちょっと！見えるところに傷つけないでよ!？」

女はそういいながら男と楽しげにわしを見ている。痛みをやり過ぎたわしは状況を確認する。

扉は食卓の向こうにひとつ。窓は格子がかかっている。この体では走るのも遅い。利用できるものはないか……。

状況は極めて自分に不利だ。利があるとすればわしの中身は幼子ではない。このくらいの傷で恐怖して夫婦に従うこともないことぐらい。油断させてから逃げ道を確保するしかなかるう。

「さてと。始めようか。」

女の声で頷いた男が小さな箱のようなものを出してきてこちらに構えた。「カメラ」だ。

「自分で脱げるかな？」

「そりゃ、無理だろう。」

「この子、綺麗だし、金になりそうだね。傷もマニアに受けそう。」
「どうやらわしを裸にして「絵」を撮る算段らしい。さすがに我慢できん。服を剥ぎ取られそうになって暴れた。」

「この！大人しくしろ！」

女の腹に上手く蹴りが入って男のほうによろめいた。しめた！後ろが空いた！わしは女の後方の扉に向って走ると扉を開けて逃げた。玄関までたどり着いたが鍵がかかっている。諦めてすぐ横の階段から二階へと殊な鍵が付けられているらしい。諦めてすぐ横の階段から二階へと上がる。後ろから男女の罵り声が追いかけてくる。

「くそっ！どこに行った!？」

「どうせ、逃げられやしない！探せ！」

箆笥の奥に隠れて様子を窺う。ここもすぐに見つかるに違いない。窓から出れるところがあつただろうか。ひとまず息を整えてからだ。足元がすべる。紙が重ねてあるようだ。薄暗い中、目が慣れるとそれが何であるかが分つた。縛られて傷つけられた幼子たちの「写真」……何百枚も。嫌悪が込み上げる。しかし幼子の姿の自分に何が出来よう。逃げる事もままならないというのに。

カオ……。

わしは間違っていたのだろうか。

見つかつても殺される事は無いとは思ふ。が、激しい折檻が待つて
いるだろう。この体で耐えられるか……。一人ずつなら気絶させるく
らいは可能だろうか。「剣」さえあれば……。熱を持った掌が心臓の
音を高くして行つた。

「出て来い！ヒスイ！」

夫婦はまだ一階を探しているようだ。

そつと箆笥から出ると意を決して窓から下を見る。植え込みに向つ
て落ちれば何とかかなりそうだ。

幼子の姿のわしには二階からでも結構な高さに見えた。思っている
よりこの体は弱い。気をつけながら植え込みに上手く落ちると手足
に軽い擦り傷だけで済んだ。

とにかく、この場を離れなければ。

慎重に辺りを見回しながら夫婦の家を離れる。

衣食住どころではなかった。

平和に思えたこの国も心の黒い人間はいるのだ。

カオに守られて忘れていた。

情けないな。自分ひとりの世話も出きないとは。

随分歩いて川原にたどり着いたわしは川を見ながら膝を抱えた。こ
こなら夫婦にも見つかるまい。

……カオのところへ戻ってもいいだろうか。

いまさら戻って受け入れてくれるだろうか。

ぐるぐると考えながら夜になったがカオのところへ帰らぬまま外で
過ごした。

異世界で幼子の姿のまま。

戦場で見上げた空と全く別の夜空がわしを包んで、わしはこの世界
に来て初めて孤独を味わった。

暗闇が身を包む(後書き)

ヒスイとカオリのイラストを描いてみました興味のある方

<http://795.mitemin.net/i13516/>

<http://795.mitemin.net/i13515/>

君は何処へ（前書き）

* * 眉をひそめる表現が少し出ます。

君は何処へ

「おかあさん、どうしてヒスイとあそんじゃいけないの？」

「ダメじゃないよ？でも、少しの間だけ逢えないの。ヒスイがむこうのお家に慣れるまで……。」

「いやだ！ミチはヒスイとあそぶの！」

「いや、だから、イヤだって言ってもね……。」

わあわあと泣き出すミチと不満げなヒロ。

ヒスイがあちらの夫婦に預けられてから3日。毎日繰り返されるヒロの質問攻撃。最近年少組として幼稚園通いしだしたミチも参戦してくる。まったく困ったなあ。毎日遊んでいたから急に駄目って言ったって「なんで？」って思うよね。車で15分くらいのところだし。本当は私だって納得していない。幼稚園に通わす気配もまだ無いし、あの夫婦に「ヒスイ君が慣れるまでは一切の連絡はご遠慮ください。」と言われたカオちゃんの顔といたら……。でも、カオちゃんはあの通り忍耐の人でしょ？毎日修行僧のように耐えてるよ。

ああ。なんか暗いカオちゃん見てたらこの話を進めるのは良くなかったかなあって後悔してる。実際ジイ様が亡くなって寂しいカオちゃんの心の穴を埋めていたのは「ヒスイ」だったって分ったんだもの。一日一日とカオちゃんが沈んでいってしまう……。こっそり連れて帰ってきちゃおうかな。ほんと。

「どう思いますかね、社長。」

「あぶ。」

思わずベビーカーのトモに相談する。なんでこんなに貫禄あるかな三男坊。特に顎のぽっちゃり加減が。

「ミチ。ほら。ラムネ食べていいから。言っとくけど今日だけ特別だよ!」

「うえ、うえ……。」

「ヒロも!」

「いいよ。ほら。」

ラムネであらゆる攻撃を抑えつつ道場に逃げ込む事にしよう。まったく幼稚園からの帰り道がこんなに遠く感じるとは……。

「カオちゃん!居る?」

「ヒロ、のどかわいた。」

「ミチも。」

「もう、台所行って飲んできな。」

「おかあさん!カル〇スのんでいい?」

「ミチもかるひす。」

「わかった、良いから。」

ベビーカーでうとうととしていたトモが寝てしまったのでそのまま玄関に放置。薄目を開けて白目が出ている姿は我が子でもコワイ。お願いだから寝る時はしっかり目を瞑ろうね、トモ。兄ちゃん二人はカオちゃんがいとも置いてくれているジュースを飲みに一目散、屋敷の中へと消えていった。

今日は水曜日だから定休日。大抵カオちゃんは道場の掃除をしている筈。

あれ、居ないのかな？

「……………」

奥のジイ様の部屋に居たカオちゃんの手には……

ジイ様が大切にしていた云われ怪しげな宝刀「鬼丸」が……。

「ぎゃ〜っ！何してんの！？カオちゃん！ひ、人殺しだけは！！」

「……………」サト、落ち着け。手入れをしていただけだ。ヒロとミチに見せたくない。」

「はっ。二人は台所一直線……………」ふうう。」

日本刀を振りかざす幼児。どう考えてもスプラッタだもんね。ありがとう乳清涼飲料。

「つばがカタカタと鳴るんだ。どういうわけか。」

カオちゃんが持つてる鬼丸（日本刀）を見るとなるほどカタカタ震えている。

「ぎゃく。なんか、こわいよ。前から思ってたけど妖刀なんだよそれ。古美術商に売ってしまおうよ。」

「ジイ様の大切にしていたものだからそういつ訳にもいかん。」

「だったら、早く箱に戻して!」

「……わかった。」

桐箱にカオちゃんが手をかけたとき、電話が鳴った。

「サト、しまつて置いて。」

ぎゃくつ!「鬼丸」を托されてしまった。この艶々感がたまらなくイヤ!大体、なんで「鬼丸」って言う名前だというとその昔、鬼を真つ二つに切れたほど切れ味が良かったとかなんとか。今そんなの必要ないし!キモイ!コワイ!

「なんで震えてるのかな?はは。あははは……。」

やつとこさ鞆に収めたかと思うとカオちゃんが帰って来た。カオちゃんも黙って鬼丸を私から受け取ると……

ザンッ

大きな風を切る音がしたかと思えば目の前の障子扉が真つ二つに斜めにずれて行く。

再び鞘から出された鬼丸はカオちゃんの手によって艶々と輝いていた。

「……………」

「え！？何！？」

「ヒスイが居なくなつたようだ……………」

カオちゃんはそういつてカチャリと鬼丸を鞘に収めた…………い、生きた心地がしません。

お、怒つてる？怒つてるんだよね！？カオちゃん。こ、こえ…………つ。

「サト、ちよつと行つて来る。留守を頼む。」

「お、鬼丸は置いていつて！」

それだけは！ほんとに捕まっちゃうから！

少しだけふつと笑つたカオちゃんは鬼丸を私に手渡すと外出着に着替え始めた。

とりあえず桐箱に刀をしまつて急ぐカオちゃんを追いかける。

「車の方が早いよ！私が出すから。」

「チビたちはどうするんだ。自転車で行くから…。」

二人で言い合っているところに招かざる客が来た。

「カオリ〜？居る〜？マイハニ〜。」

いつもは鬱陶しいだけだけど、今日はよく来た！

「ちょうどいい！幸太郎！子供たちをお願いね！」

「へっ！？なに？どこ行くの？」

チビたちに見つかる前に出なくては！！車のエンジンをかけて幸太郎に手を振った。助手席にカオちゃんが乗り込む。

「サト、どこに行くか分ってるのか？」

「もちろん。ヒスイになにかあったんでしょ？預け先はばつちり押さえてるよ…！」

「……………」

「何年、姉妹やってると思ってんの？カオちゃんのサポート体制はばつちりよ。」

「心強いな。」

ちらりと横を見れば硬い表情のカオちゃん。

「で、電話ではなんて？もしかして家出しちゃったの？」

「こっちに来ていないかただけ。それだけ確認してすぐ切れた。」

「あの子が家を出るとしたらよっぽどだよな。」

信号が青になって見えなかったけど、カオちゃんが頷くのが気配でわかった。

インターフォンで呼び出すと取り乱した奥さんが出てきた。なんか香水臭いな、この人。

「ヒスイは家を出たんですか？何かあったんですか？」

カオちゃんが奥さんに質問した。奥さんの顔が青い。

「いえ。大したことじゃありませんので。お引取り下さい…。」

その言葉でカチンとくる。子供を持つ親としては捨てて置けない言葉だ。

「居なくなっただんでしょ？こっちに連絡してくるなんてよっぽどで

すよね？5歳の子が居なくなつて大した事無い分けないでしょ？」

「……いえ、もう見つかったので。」

「では、逢わせてください。」

「それは…お断りします！」

なぐんか「嘘」っぽいよなあ。よく見ると組み合わせは野暮ったいけど服はブランド、履いてるミュールだってヒールが高すぎる。お化粧バッチリで香水臭いつてホントに子供好きかな？この人。村長さんの紹介だつて言うから安心してたけど、怪しくない？

「主人が帰ってきますのでお帰りください。」

ふぐん。こんな時間に帰ってくるって？そんなに私たちを帰したい訳？

「少し、お話しませんか？」

「え。」

「カオちゃん、お家に入れてもらおう！」

「そうだな。邪魔する。」

慌てる奥さんをヒラリとかわしたカオちゃんが玄関からいとも簡単に進入する。続いて私も邪魔。何これ、なんで内側にも鍵が付いてるの？

「あ、あなたたち！不法侵入よ！」

「お茶を呼ばれに来ただけだ。」

台所にはお惣菜のパックとお弁当のパックの山。床にはケーキの残骸が。

「ヒスイ！」

カオちゃんがヒスイを呼びながら二階に上がる。

「け、警察を呼ぶわよ！それ以上入らないで！出て行け！」

狂ったように奥さんがカオちゃんの後を追って行った。

さらにその後ろから追いついた私が見たものは……

「警察を呼ばれて困るのはそちらの方でしょう？」

まだ肌寒いこの季節。

冷房を異常に効かせた部屋の中で数個有る段ボール箱のひとつを開けるカオちゃんだった。

「3体とも死後1年以上は経っています。」

ああ。子供たちを置いてきて良かった。こんなの、見せられるわけが無い。

通報してから数時間後に何食わぬ顔で夫も帰って来た。もちろん、その場で…事情徴収という名の逮捕。

クローゼットの中からは幼い子供の酷い写真が山のように出てきた。この平和な村ではじめてとも言える衝撃的なニュースだ。

「カオちゃん、ヒスイは昨日の夕方逃げ出したんだって。2階の窓から飛び降りたみたい。」

「……………」

「村の青年団の人も探してくれる。私たちも探しに行こう。きっと心細くて震えてる。」

カオちゃんを見ると先ほどから下を向いて泣いている。私も泣きたいけど、泣き上戸のカオちゃんを元氣付けるのは昔から私の役目だから泣いたりしない。

「私のせいでヒスイが……………。それでなくともあの子は辛い目にあってきただろうに……………」

ゴシゴシと目を擦りながら歩くカオちゃんの手を握る。私だって村長さんの話に安易に乗ってカオちゃんに話を勧めてしまった。

「お〜い！サトリ！」

力強い声が私を呼んだ。

「明人さん！ど、どうしたの！？ここ、担当じゃないでしょ？」

「サトリのピンチに駆けつけないわけないだろ？地元だって言っ
てアピールしてきた。」

ポツポツと報道陣が現れ出した。明人さんは新聞記者だがここは担
当ではない。無理を言っ
て来てくれたのかもしれない。さつき電話
で力オちゃん
が落ち込んでるって言ったしね。

「あのね、明人さん、ヒスイが見つかったら……。」

「いいよ。」

「え！？まだ何も言っ
てないけど？」

「ヒスイ君、うちで引きとっ
てもいいよ。もちろん力オ
りさん
のところ
で育てていい。」

「な、なんで私が言っ
た事わかったの？」

「分るよ、何年夫婦やっ
てきてると思っ
てるの。」

からかうように明人さんが言っ
た。夫婦は6年しかしてないけど私
たちは知り合っ
た時から通じるものが多いからこの言葉をよくおど
けて使う。

「さすが私の旦那さま。」

「けど、勝手に踏み込んだんだろ？根性座っ
てるね、君たち姉妹は。」

「それでこそ門田家の娘である。カオちゃん！明人さんの了解も取れた！後はヒスイを見つけよう！」

「……それでいいのか？サト。明人さん。」

「カオちゃんがいいならね。」

頷く私たちを見て少し笑顔の出たカオちゃんと捜索隊に加わった。

日は非情にも落ちていく。

小さい子が一人でこの寒い夜をこせているのだろうか。

焦る気持ちを他所に捜索は夜まで続いた。

君は何処へ（後書き）

明人さんはサトリより10歳年上の設定です。

そのころ幸太郎は起き出したトモのオムツを変えてパツクの離乳食を。

ヒロとミチに馬にされ、レトルトカレーで仲良く夕食。

なかなか役に立つ男でした。

この想いはこの胸に

寒い……な。

流石に野宿はキツイ。

川原で寝転んでいたが、寒くなってきた。何かで暖をとらなくては最近覚えた漢字を思い出す。確か……。

「火」

と指で地面に書いてみる。

ポツと小さな火が出現して消える。燃やすものが無ければ使えないか。

試行錯誤の結果、こちらの文字でも数種類の文字に言霊が宿る事がわかった。元の世界で操る文字は「神語」という。文字通り「神」の宿る文字にわしのような特殊な能力の有る者が言霊をのせるとそのものの本質が出現する。縦の空間で移動するわしの世界ではこのような方法で互いの空間を移動するのだ。ただし、相手側にもその意思がないと門は開かないので勝手に移動は出来ない。

元の世界の名称が判れば門が開くかもしれない。そう考えて以前「水の国」（水の國とも）と書いてみたが水が出て紙が濡れてしまっただけだった。こちらの世界から見ての名前なのか。そんなものがあるのかは解らなかった。いつか、わしは帰れるのであろうか。

……水の國に帰るとしていつも浮ぶのは力才の顔。今少し離れただ

けでもカオに会いたいと思うのはどうしてだろう。カオの言葉が思い出されては頭の中で響く。

こうして二人で歩いていると親子のようだな

わしはカオに母親を重ねていたのだろうか。生まれてこのかた見たこともない母に？

もちろんカオを母と思ったことなど無い。あれだけ世話になったのだ大切に思うのは当たり前だろう。

……当たり前なのだろうか。

答えを出したくなくてわしはごろりと寝返りを打った。

「カオ……。」

ポツリとその名を呼ぶ。

そういえばカオは真名はどう書くのか。確か…。

何の気なしにわしは指で「門田カオリ」と土に書いた。すると、意外なことが起こり始めた。目の前にきらきらと光の粒が集まってきたのだ。

まさか……。 「門」は相手側の意思が無ければ出現しないのだ。そう思うも目の前の光の粒はどんどん大きくなってくる。やがて光で出来た門が完成した。元の世界で使用していたものとなんら代わりの無い門だ。恐る恐る光の門をくぐる。緊張が寒さで体が震える。くぐったその先は……

初めてこの世界にやってきた所と同じ門田の屋敷の池の前であった。

池の前では一人しくしくと泣く女ひとが居る。
それが誰だかわからぬ筈がない。

ああ。カオは泣き虫なのだ。あんなにいつも凜としているのに些細な事でも涙ぐむ。

そういえばわしの傷を見るたびいつも涙ぐんでいた。優しい。優しい。優しいカオ。

カオの幸せの為に離れたのに結局こんなに泣かせてしまった。意地を張らずにすぐに帰れば良かったと今更後悔しても仕方が無い。

「カオ。………すまない。」

「………っ！ヒスイ!？」

いつものカオならば気配ですぐわかった筈なのにわしが背中に手を置くとびくりとカオは体を震わせて驚いた。

「ヒスイ!」

次の瞬間がばりとカオに抱きしめられる。確認するようにカオの細い指が震えながら顔をなぞっている。

「こんなに冷えて……。顔も殴られたのだな。酷い目に……酷い目にあわせてしまつてすまない。ほかに怪我は無いか？お腹は空いてな

いか？ここまで一人で逃げて来たのか？」

矢継ぎ早に聞かれても返答に困ってしまう。ああ。カオだ。カオの匂いがする。わしは抱きしめ返してカオを堪能する。わしの顔を覗き見ながらもカオの瞳からはぼるぼると大粒の涙が流れていた。

「許してくれ。ヒスイ。もう二度とお前を何処かにやったりしない。私になんとかヒスイを育ててみせる。だから……私のところへ帰って来てくれないか？」

カオの声色も顔も切羽詰った状態だった。恐らくわしが追い詰めてしまったのだ。この優しい人を。わしが見つからない間ずっと泣いていたに違いない。こんなに目を腫らしてわしを探していてくれたのか。

「カオ……。わしは母はいらない。カオに母親になってもらいたいわけじゃない。」

「……。私が……嫌いか？」

鼻をすすりながらひどく切なそうにカオがわしをみつめてくる。きつとカオはわしの信頼を裏切ったのだと誤解しているだろう。もう、降参だ。ここで認めなくてどうだというのだ。目の前の女ひとがこんなに愛しいのだ。こんなこどもの形なりでしかも異世界人のわしが。釣り合うわけもない。与えられるものは何一つ持っていない守られるだけのわしだ。でも……少しでもカオの心が軽くなるなら恥も掻き捨てて言えばいい。

「わしはカオと夫婦夫婦になりたい。だから、母では駄目なのだ。」

半ばから投げやりに言っているとカオがぽかんとわしを見た。そしてわしの言葉の意味を理解したらしく、ふわりと笑った。

……その笑顔は反則だ。

「私は嫌われていないのかな？」

カオがほっとした笑顔で言う。

「わしはカオが好きだ。」

耐えられず視線を逸らすとカオがギュウギュウと抱きしめてきた。

「私もヒスイが好きだよ。」

カオもそう言ってくれる。正直うれしい……が、わしの心は複雑だ。カオにとってわしは幼子に過ぎんからな。まったくわかつているのだろうか。

「カオ、わしが元の姿に戻ったら、結婚してくれるか？」

「ああ。いいぞ。いいぞ。」

うれしそうにカオが答える。その答え、後になって必ず後悔させてみせる。

「約束だからな。」

にっこり笑って「わかった。」と答えるカオが少し恨めしかった。

無事に門田家に帰って来れたわしは力才の作る温かい食事と日の匂いのする布団にありついた。サトリや如月も心配してくれていたらしく皆、涙を流しながらわしの帰りを歓迎してくれた。一晩明けた後は一度ちゃんと話をするといってサトリのマンションという集合住宅に連れて行かれた。色々面倒な事があるようでわしはサトリのところの子供として「戸籍」というものを作る事になったとサトリの夫に説明された。この明人という者、なかなか頭の良さそうな物腰の柔らかい好人物であった。

「ヒスイ君がよければ僕のこと「お父さん」って呼んでもいいんだけどね。」

頭をかいてそう言ってくれた無精ひげの良く似合う良い男だ。ヒロは「ぼくがおにいちゃんていいよね？」と何度も確認してはサトリに「それは無理。」と言われていた。皆良い人物だ。今のわしにはもつたいたい。こんな人たちをこのまま騙していい訳はない。その日はヒロたちと子供部屋で一緒に眠った。幼子の柔らかい寝息を聞きながら一晩考えてわしは決心をした。

次の日に仮にも親になってくれたサトリからに本当のことを話すことにした。理解してもらうまで今度は諦めずに話すつもりだった。サトリの夫は朝早く仕事に出て行って居なかつたのでヒロとミチを幼稚園に送って行ってから門田の屋敷に向う。力才は道場で稽古をつけていてトモも寝てしまったので部屋でサトリと二人きりになった。ここが良いだろうと勝手に思い、門田のジイ様の遺影の前で背

筋を正してサトリを見据えた。

「……で、つまりヒスイは異世界からやってきて本当は24歳だと」

確認するサトリにわしは頷く。サトリもかしこまっつて何事だと言っていたが、私と向き合っつて正座をして聞いてくれている。この姉妹は姿勢が美しい。

「はあ。マジですか。思えば出会った時もそんなことを言っていたような。いやいや、でも…知り合っつた頃だと信じられないけど、今は…。はああ。」

「信じてくれるか？」

信じてもらえるよう事細かには説明もしたし、状況の説明がどれだけ出来るかを知っつてもらっつたためにあの夫婦に受けた仕打ちなども詳細に聞かせた。

「大人びてるっつていうにはもうおかしいよね…。作り話にしては出来すぎるし。その、変な…いや、超能力みたいのも見せしてもらっつたし。だからっつて…。うん。」

先ほど「水」と書いて見せたので畳の上が濡れていた。それを虚ろに見つめながらサトリがわしに言っつた。動揺しているようだが話は受け入れてもらえそうだ。このまま力オにも話そう。そう思っつたとき、サトリが口を開いた。

「ヒスイ。この話は秘密に出来ないかな。ヒスイの中身が成人だと色々面倒な事が…。」

「……………」

「確か、カオちゃんとお風呂も入ったよね……………」

「……………」

「一緒に寝た事も……………あるよね。」

「……………」

「カオちゃんはそういう方面は駄目なの。ああ、駄目。駄目すぎる。開き直れない。落下。落下する。」

「落下…気落ちするということか？」

頭を抱えたサトリが恨めしそうにわしを見た。

「あのさ、ヒスイはぶつちやけカオちゃんどう思ってるの？元の世界に戻れたらどうするの？」

「出来れば付いてきて欲しいと思っている。その時は生涯全身全霊で守る。」

「はっ。」

鼻で笑ってサトリが「プロポーズかよ。」と壁に向かってブツブツなにか呟いている。

「で、姿もそのまま、元にも戻れない時は？」

「……そのときは。」

「そのときは？」

「……男らしく諦める。けれど出来るかぎりはこちらの世界でも力を守りたい。」

「……はあ。決意は固い？」

「うむ。」

「じゃあ、尚更元の姿に戻るまでは今のままで頑張つて。元の場所に帰る時にカオちゃんが付いていく付いていかないはカオちゃんが決める事だけど、今のままで帰れない場合はカオちゃんへの想いと異世界人だという秘密を抱えたまま墓に入つてちょうだい。そのくらの覚悟を持ってカオちゃんと暮らして欲しいんだけど。」

「……わかった。」

「唯一人、ヒスイの秘密を知る者としては出来る限り協力するよ。でも、今日からは寝るのはカオちゃんとは別の部屋。カオちゃんにけしからん事をしたら追い出すからね。」

「恩人に不埒なまねはせん。が……あいわかった。」

わしがそういうと「はああ」とサトリが盛大にため息をついてわたしを見た。

昼食時に本当にこれでいいのかわかると思い、サトリを見るとすごい形相で首を振られた。……カオには絶対に秘密を漏らすなど言いたいのであろう。周りを混乱させるだけなら今のまま黙っていた方が良くないかもしれない。サトリの言う通りこの姿のまま帰れない場合もあるのだ。その時はカオへの想いも葬らなければなるまい。

「なんだ、親子になる人たちは随分仲が良くなったのだな。うらやましい。」

こちらを見ながらカオが言った。わしが打ち解けてきたのがうれしいと言わんばかりだ。

「味噌汁のおかわりはいるか？」

その言葉を聞くと同時に空になった椀をカオに差し出す。くすりと笑いながらカオがそれを受け取った。

わしとカオのやり取りを見ていたサトリがわしをジッと見て何か言いたそうにしていた。出来れば見逃してくれ……そう心苦しく思った時、騒々しい足音が聞こえた。

「門田カオリって人はどこ!？」

いきなり人の家の食卓に現れた派手な婦人は口を開くなりそう言った。驚いたカオがそれでも名乗ろうとしたが婦人が指差す方が早かった。

「貴方ね！うちの憲太郎を誑かしてるのは！！」

激昂している婦人の指の先にはポトリと焼魚を箸から落としたりが居た。

この想いはこの胸に（後書き）

憲太郎くんとはあの人です。

サトリの受難（前書き）

今回はあまり話が進んでおりません（汗）

サトリの受難

ヒスイは一人で門田の家まで帰ってきた。

池のところでこっさり泣いていた力オちゃんはそれはそれは大事そうにヒスイを家の中に招き入れた。

ヒスイの顔は殴られて腫れていた。さらに明るい家の中で見ると手の甲にもタバコの火で焼かれたとわかる傷が生々しくあった。力オちゃんはヒスイを膝に抱えたまま大事そうに黙って軟膏を刷り込んだ。

「あの夫婦……。やはり鬼丸を持っていけばよかった……。」

ヒスイに顔を背けて言う力オちゃんは正直恐ろしかった。私も頭にはきていたけれど、早く見つかったという気持ちのほうが大きい。とにかくヒスイにご飯を食べさせて寝かしつけた力オちゃんにやっと笑顔が出てほっとした。あのまま見つからなかったら……考えただけでも恐ろしい。この件でヒスイの存在がどんなに大きくなっていったか力オちゃんも私も痛いほどわかった。明人さんも了解してくれたしヒスイはうちで引き取って力オちゃん家で育てよう。

そう心に決めてヒスイを大事に抱える力オちゃんを見つめた。

……これで一件落着。

その時は目頭に涙さえ浮んだんだけど。

明人さんと一緒にヒスイがうちの子になると説明した翌日、私はヒスイから爆弾投下されてしまった。

その日、ヒロとミチを幼稚園に送って門田に向い、ベビーカーで寝てしまったトモを布団に寝かせると一息ついていた。いつもならドリルなんかで勝手に勉強しているヒスイが私に声をかけてきた。

「サトリ殿。話がある。」

ま〜「おかあさん」とは呼べないにしても「殿」ってどうよ?と苦笑して促されるまま仏壇の前に正座させられた。いや、だって幼児にちゃんと正座してもらってて私が崩して座るわけには……。真剣な面持ちなヒスイが言った。

「信じてもらえなかったのをいいことに自分の都合のいいように黙っていた。心からお詫びする。しかし、騙すつもりはなかったのだ。もう一度言うが、わしは水の國の第二王子で翡翠という。ここではない世界からやってきた異世界人である。本当の歳は24。今はなぜか幼子の姿になっているがこの姿は本来の姿ではない。」

すらすらとヒスイの幼い口から難しい言葉がでる。私の口はおそらくポカ〜ンと空いている。ドコゾの児童演劇団員でもこんなにもスラスラ言えるだろうか。

「……。」

「このまま世話になつては力オに迷惑がかかると思い、養子の話を受けた。だが先方は幼子を酷い目に合わせて絵に収め、金を稼ぐ輩だったので隙を見て逃げた。正面玄関には内側からも鍵がかけられ、大きな窓には柵が取り付けられてあった。二階には3部屋あり、夫

婦の衣裳部屋の箆笥の奥には沢山の幼子の酷い絵があった。わしは裸にされそうになって頬を打たれた上に手の甲を焼かれたが、お陰で隙ができた夫婦から逃げ、2階の柵のない北東の窓から生垣めがけて飛んだのだ。」

……だれか、今言葉を発した人物が天才児だと言ってくれ。飽和状態の頭で私の口から捻り出たのは

「……で、つまりヒスイは異世界からやってきて本当は24歳だと。」

という言葉だけ……。

確認するとヒスイはうれしそうに頷いた。私の頭には数々のヒスイの行いが巡りだす。

「はあ。マジですか。思えば出会った時もそんなことを言っていたような。いやいや、でも……知り合った頃だと信じられないけど、今は……。はああ。」

ブツブツと独り言のように口に出してみる。確かに、大人びていた。行動だつてなんだつて。昨日だつて事件があつたばかりでシヨックも強いだろうからうちの養子にする話は後にしようかと思つてた。でも、明人さんは今朝から一週間出張だつたし、試しに「カオチャ」と離れてうちに来るのは無理かな？」とヒスイに尋ねてみたら「問題ない」って答えたもんね。カオちゃんの方が不安がつてたくらいだもん。

「信じてくれるか？」

続けるような目で見られても……

信じるも何も、あんた中身は大人だったんかい！？
つてツッコんでみたいものの、確かに最初に何度も言ってたのを聞き流したのは私……。いやいや、聞き入れないどころか作り話だとカオちゃんに説明して見せていた……。自信満々に。

「これではどうだろうか。」

ヒスイは目の前に半紙を出してくる。その指で半紙をなぞる……。

「ええ！？」

「水」と恐らく書いたのだろう、文字をたどってから水溜りが半紙を濡らした。

「わしの世界ではこんな力が使える。」

ああ、頭の中が整頓できない。完全に許容範囲オーバー。でも、目の前の瞳は現実逃避を許してくれそうもない。

「大人びてるっていうにはもうおかしいよね……。作り話には出来すぎてるし。その、変な……いや、超能力みたいのも見せてもらっ
たし。だからって……。うん。」

この得体の知れない目の前の人物を拒否するべき？

でも、この数ヶ月一緒に居て危険だった事なんて一度もない。
トモが土間から落ちそうなきはいつもヒスイが助けてくれていたし、ヒロやミチが異常に懐いていたのも本当はトイレとか着替えとか色々面倒見てくれていたからだと思う。今だって本当は言わなくていいこと言ってる。性根が悪いわけじゃないんだ。……出来れば黙っててほしかったけど。

……平たく言えば宇宙人みたいなものかな。

ああ。もう考えたくないんだけど！どうもこうもないじゃないか！カオちゃんには今ヒスイが必要だし……。はあ。この場所から消えてなくなりたい……。今すぐ。

「ヒスイ。この話は秘密に出来ないかな。ヒスイの中身が成人だと色々面倒な事が……。」

「……。」

「確か、カオちゃんとお風呂も入ったよね……。」

「……。」

「一緒に寝た事も……。あるよね。」

「……。」

「カオちゃんはそういう方面は駄目なの。ああ、駄目。駄目すぎる。開き直れない。落下。落下する。」

宇宙人の成人男性と風呂入って一緒に寝たなんて耐えられるか！カオちゃんは「異世界人」はスルーできるかもしれないけど「成人男性」には泡噴いて倒れるわ！ああ見えて超純情なんだから！

「落下…気落ちするということか？」

頭を抱えた私を見て心配そうにヒスイが言う。ああ。わかってるよ。

ヒスイはカオちゃんが大好きだもんね！傍で見てもわかるくらい！ムツとしてヒスイに尋ねる。大体、なんで最初に私に話すかな！？

「あのさ、ヒスイはぶつちやけカオちゃんどう思ってたんの？元の世界に戻れたらどうするの？」

「出来れば付いてきて欲しいと思っている。その時は生涯全身全霊で守る。」

……いつちよ前にプロポーズかよ。「嫁」か！？カオちゃんをそんな目で見えるか！？……まあ、中途半端なほうがムカつくかもだけど。

「で、姿もそのまま、元にも戻れない時は？」

「……そのときは。」

「そのときは？」

「……男らしく諦める。けれど出来るかぎりはこちらの世界でも力を守りたい。」

聞いて後悔したのは私だ。目の前の「男」は本気らしい。……幼児だけだ。

「……はあ。決意は固い？」

「うむ。」

「じゃあ、尚更元の姿に戻るまでは今のままで頑張つて。元の場所

に帰る時にカオちゃんが付いていく付いていかないはカオちゃんが決める事だけど、今のままで帰れない場合はカオちゃんへの想いと異世界人だという秘密を抱えたまま墓に入ってちょうだい。そのくらの覚悟を持ってカオちゃんと暮らして欲しいんだけど。」

「……わかった。」

「唯一人、ヒスイの秘密を知る者としては出来る限り協力するよ。でも、今日からは寝るのはカオちゃんとは別の部屋。カオちゃんにけしからん事をしたら追い出すからね。」

「恩人に不埒なまねはせん。が……あいわかった。」

多分そんなことは決してなさそうだけどそんな約束をヒスイにさせた。

迫ったってその体ではそうすることも出来ないだろう。カオちゃんを大切に想っているのもヒシヒシと感じるし。

はあああ。

頭がイタイ。

昼食時に不安そうにこちらをチラチラみるヒスイに千切れんばかりに首を振った。私がこの胸だけに治めてやろうとしているのに平和な食卓に爆弾を投下するつもりじゃないだろうな！焼け野原になる

だろうが！男なら墓場まで秘密のひとつやふたつ持っていけ！

「なんだ、親子になる人たちは随分仲が良くなったのだな。うらやましい。」

何も知らないカオちゃんがニコニコと私たちを見る。カオちゃん、私が（いろんな意味で）守ってみせるからね！

「味噌汁のおかわりはいるか？」

長年連れ添ってきた夫婦のように当たり前にヒスイがお椀を差し出す。前まではほほえましく見てとれたその光景が今は恨めしい。私の目から発せられる殺人ビームが届いたのかヒスイの目が泳ぎ出した頃、どたばたと足音が近づいてきた。

「門田カオリって人はどこ!？」

門下生の母親？　こんな黄色い花柄好きの人が村にいたっけ!？
そう思つて啞然としてしていると突然私が指差されてしまった。

「貴方ね！うちの憲太郎を誑たがかしてるのは!!！」

「へっ!？」

3人の子持ちの私に言う？誑かすほど暇もっちゃいないわ!思いつきり眉をひそめてカオちゃんを見ると……意外にも机の下でごめんなさいと手が揺れている。なに!？カオちゃんが「憲太郎」を誑かしたの？

「マンションの鍵を返しなさい!憲太郎には弥生さんっていう立派

な婚約者が居るのよ！同棲なんて！汚らわしい！！」

「同棲」なんてカオちゃんがしている訳もなく……でも、机の下の手は激しく揺れて居る……。な、何も言わない方がいいみたい。

「早く！出しなさい！！」

しかし、出せといわれても無いものは出せないし。困っていると後方からまたどたばたと焦る足音が聞こえてきた。

「母さん！やめてくれ！カオリさんは関係ない！」

そういう人物を見つめる……。

私の中で腹黒男でもなく、幼児姿宇宙人でもないカオちゃんの結婚相手ナンバーワン候補……

蔵田弁護士の登場だった。

そして屋敷は賑わう

ヒスイが家に戻ってきてくれた数日後にその事件は起きた。

しかし婦人が怒鳴り込んできた時私は悟ったのだ。ああ。その時が来てしまったのだと。

心のどこかでこの日が来るのを予感していたのかもしれない。

「バレたのだな。」

昨日は慌てて母親を連れて帰ったもののこれからどうすれば良いかわからないのだろっ青い顔をしている親友は私を見つめた。

「カオリさんと同棲してるって勘違いしてるんです。」

「正確にはカオちゃんと間違えた私と、でしょ？」

強引に隣を陣取ったサトが口を尖らせて言う。初対面の人に指をさされて罵られたのでは無理も無いか……。

「すみません。サトリさん。」

申し訳なさそうに親友はサトを見た。しかしこのままではサトにバれてしまう。そうすることは望んでいないだろう。

「サト。二人で話をさせてくれないか？」

「駄目。そうするとカオちゃんが損する役目になりそうだもん。」

「サト……。」

サトも私も『勘』が良い方だ。故バア様血統のお陰らしいが特に気にする必要もないので普通に生活している。だが何かを確実に感じているサトがこういう場合に引き下がるのは難しいだろう。さて、どうしたものか。

「いいんです。サトリさんも私の被害者です。サトリさんにも話します。カオリさん、私をかばうつもりでしょう?」

思案していると強い口調で親友が言った。

「しかし……。」

「カオリさん。いつもみたいにメグって呼んでください。」

少し吹っ切れたような顔で「メグ」が私を見た。私の親友「蔵田憲太郎」は「メグ」として向き直る。ちなみにこの「メグ」とはジイ様が命名した。

「サトリさん。私は女装が趣味なんです。」

意を決した声が部屋を通った。サトの顎は外れんばかりに下に突き出ていた。

「……??はあ?」

メグは細身の方だといっても178センチのどこからどう見ても男だ。「女装」が似合うわけではない。本人もそれは自覚しているし、

バレても困るので匿名で通る女装バーと自室の部屋の中でしか女装はしない。私は「女装趣味」と言うよりは「乙女」なのだと思うのだが「女の子になりたい」と思うわけではないらしい。複雑だが全く別の人格でありたいという願望がそうさせているのかもしれない。

「うちは代々弁護士や代議士を輩出する家系でしてね。小さいころから厳しく躰けられてきました。勉強に作法、時には友達すら親に選ばれてきました。そうして育っていくうちに私は自分が何者かわからなくなってしまうたんです。だってそうでしょう？自分がどうしたいかなんて考える暇もなく次から次へと目の前に課題が置かれていくんです。それでも周囲の期待どおりに弁護士になって、ふと気付いたら自分が空っぽだったんです。ほんと、なんにもない。」

メグは下を向いている。幼いころから人の上に立て、弱みを見せるなど育ったメグがこの話をするのは並々ならぬ勇気があるだろう。呆然と話を聞くサトの口が閉じる気配は無い。ああ、意識が何処かに向くと口が開くのは悪い癖だ。後で注意せねば。

「そんなとき大先生おおせんせいと出合って「女装バー」に連れて行ってもらったんです。着替え終わったら私はすべての事柄から自由になって子供みたいに興奮しました。人生にこんな喜びがあったなんて。それからは自分で洋服をそろえたり、着飾ったりしました。それでカオリさんと一緒に買い物して貰ってたんです。……昨日知らないうちに合鍵をつくった母が勝手に私のマンションの部屋に入って……それらを見て女の人と暮らしていると思ったのです。カオリさんと会っていたのも知られていたようですし。」

サトの顔に「ジイ様なんてことを！」とありありと書かれていた。まあ、正直私も初めはそう思ったのだから仕方ない。

私は月に一度のメグの買い物に付き合っていた。可愛い小物やらひらの服などが大好きなメグ。しかし、普段の姿では「プレゼント用で」としか買えない。かわいらしい雑貨店に入りたいものの女装して外を歩くわけも行かないと悶々としていたメグにジイ様が助け舟をだした。そう。私の背は高いし、私が買うとしたら何の障害もないのだ。傍から見れば恋人に付き合い羽振り良くプレゼントする紳士だったろう。

「メグはどうしたい？」

下を向いたまま動かないメグに私は声をかけた。ジイ様が初めてメグにであったのは飲み屋なんかじゃない。薄暗い路地だ。DVを受けていた離婚裁判の依頼主の元夫に逆恨みされて殴られ倒れていたと聞く。でも、メグはその時ジイ様に言ったのだ「私のことは放っておいて下さい。ここで尽きてもいいですから。」と。……メグは「死んだ目」をしていたらしい。メグの精神は危うい。繊細で傷つきやすく、臆病なメグには真逆の性格を演じ続けるのは辛く、気持ちの逃げ道が必要だったのだ。メグにとって「女装」は第二の人格を作り出し本来の性格をさらけ出せる貴重なものだった。

「私と結婚するか？そうすれば「女装」もばれずに婚約者も断れる。」

そう私が言うとメグの肩がびくりと揺れる。潤んだ瞳が私を捉える。口の開いたままのサトも私を見ていた。

「ちょっと、まったああああ！」

その聞き覚えがある声に振り返ると背中に眠ったトモを背負った如月がいた。なんでそこに居るのだ。

「なんで？同情して結婚するって言うなら俺だっでいいでしょ？なんでそいつのステータスの為にカオリが犠牲にならなきゃなんないんだよ！俺には愛がある！もちろん俺が幸せになる自信もある！」

ドカドカと私とメグの間に割って入った如月が自分の存在を猛アピールしてきた。

「ちょっと！他の子供はどうしたのよ！あんたそこでずっと盗み聞きしてたんじゃないでしょうね！」

「他の3人は魚釣りゲームしてるよ。ヒスイが居るから大丈夫……ってサトリ！俺の一大事でしょ！？カオリを取られてたまるかってのー！」

熟睡しているのであるうとトモの腕がダラリと如月の背中から見えている。今日の晩御飯をご馳走するのと引き換えに向こうの部屋で子供たちを見ている筈の如月はいつの間にか扉の向こうで盗み聞きしていたらしい。日に日に盗み聞きが上手くなっている……まったく性質が悪い。

「あんたの独りよがりの愛はどうでもいいけど、正論ではある。カオちゃん！いくらその人の「女装趣味」の引き金をジイ様が引いていたとしてもその結婚は私も間違ってると思うー！」

如月に加勢したサトも怒っているようだ。しかし、そうする事意外にあの頭の固い人たちからメグを守ってやる事が出来るだろうか。

「あの！」

3人がその声の方へ顔を向けると先ほどからは打って変わった能面のような顔のメグが居た。

「カオリさんにはご迷惑かけません。私がなんとかします。大丈夫です。」

頭を下げるとメグはコートを取って帰ろうとした。今あんな顔したメグを一人で帰してはいけない！そう思って手を伸ばすと意外にも如月がメグを止めた。

「ちょっと待てよ。もう迷惑かけてんだろ？ここで帰ったら余計にカオリの気を引くだろ！どうするのか言ってみるよ！」

メグの肩に手を置いた如月がまくし立てた。

「……………」

「大方、失踪つてどこか？逃げることでしか解決できないのかよ！御かわいそうな自分を嘆いて逃避行か？疑われたまま居なくなつて困るのもカオリなんだよ！」

「あ、あなたに……………」

「なんだよ？」

「あなたに私の気持ちなんてわかりっこない！」

如月の手を乱暴に払いながらメグがドンとテーブルに手をついたので湯飲みが円を描いて揺れた。

メグである時に大きな声を荒げるばかりか人を睨むなんてことない。さっきまで能面みたいだった表情が一転して赤くなり興奮している。始終オドオドしたメグには珍しいことだった。

「メグ。落ち着いて。今マンションに帰っては何かと面倒だ。どうだろう？良い策を思いつくまでここに居ては。」

「え！？カオリ！だ、駄目駄目！年頃の女の家に女装趣味とはいえ男が泊まるなんて！」

「如月。心配なら一緒に泊まってもかまわん。」

「へ！？？」

「え！？カオちゃん！？？」

「そ、それって俺も泊まっていってこと！？？」

「だから、そう言っているではないか。」

「おい。メグ。もちろん泊まるんだよな。」

自分も泊まると聞くと聞かぬや否やゲンキな如月はメグもこの家に留まるよう薦める。

「いい……ですか？」

「気にするな。そうだ、ちょうどいいのがある。白のレース付きパジャマも貸してやろう。」

袖を通す気にもなれなかった私には到底似合わないフランス土産のな。

「あ、駄目よ！アレは米山さんの奥さんがカオちゃんをオスカルにするからって……。」

「……？アライグマ柄のパジャマだったか？」

「……ま、いいよ。それは。」

サトはまだ何か言いたそうだったがそれ以上は何も言わなかった。

「ありがとう。カオリさん。」

メグは困ったような泣きそうな顔で私を見ていた。

「「親友」なんだろう？。こんな時くらい手を貸させてくれ。」

こんな顔のメグを見ただけでも良かったと思った。

……兎に角メグはここに留まることになった。この時の私の予感にあたっていたと思う。

如月とメグ。

二人がお互いに良い影響を与えるのではないかという予感が。

そして数週間後に明人さんの単身赴任が決まった谷嶋家（サト一家）の面子も加わって門田の屋敷が騒がしくなる共同生活が始まったのだ。

そして屋敷は賑わう（後書き）

やっとサトのフルネームが明らかだ。

新しい生活 1

「さつき来てた人誰だか知ってるか？」

「お客様と大事な話があるからお兄ちゃんと遊んでね」と、サトリに促されて如月と奥の部屋に押し込まれてしまったわしとヒロとミチ……と如月の背中で眠っているトモは最近門田家でおおはやり大流行の魚釣りゲームなるものを広げる。一番多く魚釣り上げた者はおやつの盛り皿を一番目に選べることになっている。

「ん〜っと、なんかエライひと。カオちゃんのおコムサこうほっておかあさんがいった。」

「オコムサ？……！！お嬢さん！？ま、マジか……。」

如月に尋ねられたヒロが答える。カオの「嬢」候補とは聞き捨てならん。ちらちらと廊下越しの応接間のある場所を如月が伺う。もちろんわしだつて気になる。

「ねえ、君たち。お兄ちゃんは大事な用事があるから三人で遊んでくれるかな？」

「え〜ヤダ。」

「ミチもヤ〜。」

ヒロとミチが反対する。なんののかんの言つてもこの男は子供受けするらしくヒロもミチも一緒に遊ぶのが大好きなのだ。

「ヒロ、ミチ。」

わしはこっそり釣竿の先の磁石に「強」と書く。すると普段は一匹しか釣れない魚がガシャガシャと山になってくつついた。

「わ、わ~~~~！かして！かして！」

二人が団子になってわしの方へと向かってくる。さあ、如月。行って様子を見てくるのだ。場合によっては妨害してくればよい。じつと如月を見据えれば、わしの意図が分かったのか如月が慌てて頷いた。

「じゃあ、頼むよ。ヒスイくん。」

うむ。頼んだぞ。如月。

いつまで経っても帰ってこない如月も気になったがヒロとミチがおやつの時間だと騒ぎ出してしまったので二人を連れて食堂へと向かった。小さい体では食物庫の扉を開けるのも苦闘する。

「ごめん！ごめん！ヒスイ。後は私がやるから応接間に行ってくれるかな？」

物音に気づいたのかサトリがやってきた。

「も〜おかあさん！おそいよお〜おなかすいた！」

「ミチはチョコ！チョコついたやつう！」

「もってくからあなたたちもヒスイと一緒に応接間に行つて。」

「ジューズは？」

「ミチもジューシュ！」

「持つてく。持つてく。」

ハイハイとサトリに追い出されるように食堂から出されたわしはヒロとミチの背中を押しながら応接間に向かった。

そこには前に一度養子の件で会ったことのある男が座っていた。帰つてこなかった如月もにやけ顔で座っている。

「ヒスイ。今日からこの家でしばらく一緒に住むことになった……えゝ……。」

三人で正座してテーブルの向かいに座ると珍しくカオが言葉尻を濁した。かぶせるように男が声を上げる。

「メグといます。よろしく。ヒスイ君。」

「……ヒロとミチも仲良くしてくれ。」

メグという男は以前とは違う柔らかな表情でわしを見ていた。「婿話はどうなったのだろうか。」

「「メグ」っておんなのこみたい……。」「

「大ジイがつけた名前なんだよ。ヒロ。」

「メグ……かわいいそう。」

隣のヒロが心底哀れなものを見る目でメグという男を見る。「メグ」という名前は女子（おんな）によく使用する名前らしい。

「ヒロ、そんなにかわいいそうな名前なのか？」

「だって、オオジイはそういうのだからなんでもん。まえかってた力メだって「カメオ」だよ？」

「へ、変なのか？」

「だってさ、おんなのこだったのにおとこのなまえだったんだ。」

「ふ〜ん。」

小声で聞くとヒロはそう教えてくれた。その変わった名前です満足しているのであれば変わった男なのであろう。

「ヒスイくん！俺も今日から一緒だ！宜しくな！」

え……。如月がニコニコとこちらを見ている。

「どづいつことなのだ？この者は危険だとカオが言っていたのだぞ？」

「ちょ、そりゃないよ！ヒスイくん！」

「如月はメグが住む間だけだ。大所帯なら変な噂も立たぬだろう。ヒスイは嫌か？大丈夫だ。飯の用意には触れさせんと誓うから。」

「……わしはカオが決めたのならそれに従う。」

飯の心配はしておらんのだが……カオの操みさおはわしが守るからな。

夜になってどちらかと風呂に入るかとカオに言われた。いつもカオが何かあつてはいけないと風呂の外でわしを待っているのどちらかと入った方がカオの負担が減って良いだろう。この家の風呂は五右衛門風呂というものらしく浴槽の下が金属になっていて下から火をくべる仕組みだ。昔は門下生も使っていたというもので浴槽はさほど広くないが洗い場はまあまあ広さだ。普段は入る人数も多くないので一度沸かしてしまうと火は消されている。わしが火傷しないようにとのカオの配慮だ。

「ヒスイくん！僕と入ろう！僕！僕！」

如月はわしを味方に付けたいらしく何かと構ってくる。猫などで声で「僕」を使っているときは要注意だ。わしは男と入るのならばどちらでも構わん。誘ってくれる方が無難であろう。そう考えていたときカオが声をかけた。

「ちょっとまで。メグはうちの風呂は初めてだからな。ヒスイ。メ

グに入り方を教えてやってくれないか？」

「わかった。」

「カオリ！俺だって初めてだから……優しくして？」

くねって如月がカオを見るとカオが眉間にしわを寄せた。

「お前はうちの風呂の構造には詳しくかろう？」

思わせぶりなカオの言葉でメグとわしは如月を見た。

「え、あ？ま、そのお。若気の至りというか……もうしません。」

メグとわしの軽蔑の眼がいたたまれなくなったのか謝る如月。はあ。カオの入浴中も監視せねばならん。

結局3人で入ることになり、ウキウキ前を歩く如月を見ながらぎこちなく歩くメグを連れ立って風呂に向った。

「あの。その……人と入るのはほとんどなくて。」

わしがすっかり裸になっているのにメグはモジモジとタオルで体を隠しながらゆっくりと服を脱いでいる。他人と入ったことがないの
だろうか？

「先に入るぜ？」

それに気を取られていた内にさっさと脱いでいた如月はそういつて風呂の中へと入ってしまった。

「まで！如月！一番風呂は熱いぞ！」

「熱いのへ〜きだよ。」

言いながらザバ〜ザバ〜と湯の流れる音がする。

「ぎゃ〜〜〜〜っ！！！」

「だから！待てと言ったであろう！うつけ！」

足の裏を真っ赤にした如月の足に水をかけてやる。まあ、足の裏の皮は厚いから大丈夫だろう。

「浮いていた板を外してはいかん。これを踏みながら沈めて底に足がつかんように入るのだ。この風呂は下から水を熱する仕組みで一番風呂の底はとくに熱いのだ。」

「う、うん。」

如月は幼子のように情けなくわしに介抱された。外に出されていた板を戻すと如月を風呂の中に入れてやる。

「だ、大丈夫ですか？」

心配そうにやっとな着替え終えたメグが顔を出した。

「おい、風呂でタオルは反則だろう！外せ！」

メグを見た如月はタオルの端をつかんで強引にメグのタオルを取ってしまった。

「……………」

「……………」

メグは顔を真っ赤にして下を向いたが均整のとれた筋肉の体はよく鍛えられていた。如月も肌が白い割には鍛えられているが腹が割れているわけではない。

「メグは体を鍛えているのか？」

「……………ス、スポーツジムで……………。ただでさえ似合わないのに小太りの男の女装にはなりたくなくて。」

「？メグは女装が好きなのか？」

「あつ……………う、うん。そうだよ、ヒスイ君。」

そういえば陸の国にはそういう部族がいた。女のような服装を好むがそれでいてめっぽう腕利きの集団だ。メグはそういった部類の人間なのだろうか。

「ヒスイ君は私のことを変だと思っかい？」

「人はその本質に従えばよい。」

「……ヒスイ君で難しい言葉知ってるね。でも、うん。そういわれると力が出るよ。」

「……ちっ。」

黙って成り行きを聞いていた如月の舌打ちで会話は終了した。風呂から出た如月はカオに足の裏を見せて同情してもらおうと騒ぎ立てたが「なら、帰れ。」と一掃されて軟膏を渡されていた。夜着に着替えたメグはヒラヒラの服がよほど気に入ったのか脱衣場の小さな鏡の前で何度も回っていた。

「どうだった？あの二人と入ると疲れただろう？」

風呂上りに牛乳をカオが差し出してくれる。早く育つのだというのだからたくさん飲んで元の姿に戻らねば。

「騒がしくあるが問題ない。」

そう答えるとカオはふっと笑ってわしが飲み終わるのを嬉しそうに眺めていた。

「カオちゃん……谷嶋家の一大事です……。」

次の日サトリが青い顔してヒロたちを幼稚園に送った後にやってきた。カオはわしにも幼稚園を進めたがサトリの助言通りにまだ人が怖いと言って入園は断念してもらった。その代りにヒロと一緒に道場に週2、3回顔を出している。

サトリの背中からトモを受け取ったわしは布団の上にトモを寝かせてやる。最近寝返りができるようになったトモはずいぶん布団の上で動けるようになった。

「どうしたんだ、サト。」

「明人さんの単身赴任が決まった……。」

「？単身赴任？ついていけないのか？その時はついて行ってくつて言っ
てなかったか？」

「フィリピン2年は微妙じゃない？なんか入院した人のピンチヒッターだからずっとじゃないらしいんだけど、私は語学からつきしまだし、2年ほどつていうのも微妙……明人さんもカオちゃんのところにいる方が安心じゃないかって言うから。」

「確かに2年だけ3人連れて海外はきついな。」

「ヒロは来年小学校だしなあ。ぐすん。」

「まあ、大丈夫だろう。持ち家もあるのだから今のままで待っている方がいいだろうしな。」

「うっ。」

……なにやらサトリの夫が遠征に出るらしい。父親が大好きなヒロたちは悲しむであろうな。わしは笑っているトモの頭をなでてやった。

サトリ親子は次の週に旅立った夫を見送って帰ってくると夕飯まで門田の屋敷で暮らし、朝こちらにくるといふ生活をする事になった。しばらくしたら家に帰るだろうと思っていたメグは結局門田に居座ることとなる。と、いうことはもちろん如月も一緒だ。

そしてメグの家財道具を運び出すという面倒な任務に就いたのは最後まで文句を言っていた如月とわしだった。

任務遂行の間に

「なんで俺があ。」

文句を言いながら如月がそっぽを向く。女子高生さながらの言葉の強弱にすこし呆れる。上目使いは女の子の特権だと思つなよと言わんばかりの態度の如月は残念なことに立派な成人男子だ。

「適任なのだが、無理ならいい。」

「無理なんて言っていないけど。ご褒美チョーダイ。」

「褒美か。どうする？メグ。」

「謝礼はします。」

「ちょっと！女装男から謝礼なんていらさないよ！だいたいなんだよ、吹っ切れたみたいにぴらぴらの服着やがって！ご褒美って言ったらかオリのチューでしょ！？」

「カオの頼みごとでないのにカオが褒美を出す筋合もなかるう。わしが如月の代わりに行ってこよう。」

如月の隣で黙っていたヒスイが口を開く。どうしてこういつも幼児らしからぬ言葉がでてくるのだろうか。

「ヒスイ、取ってくるものは少し重いからな。あと少なくとも5年ほど育たねばヒスイでは運べないだろう。」

それに忍び込む形で行って、通帳、印鑑などの重要書類を取ってくるのだ。大人の判断力がある。私のチューでいいなら如月にくれてやっても構わんだろう。

「ほつぺでいいのか？」

そう言うと如月が嬉しそうに目を輝かせた……が。

「カオ。わしと結婚してくれる約束をしたのではないか？ならば、今は婚約中だ。そのような不貞は許さないぞ。」

……思わぬヒスイからのヨコヤリだ。しかし、不貞ってどこで覚えたんだ。最近の家でサトが昼ドラばかり見ているからな。毎日毎日、あり得もせんことばかり起こる話で確か昨日は実の兄妹であることが発覚して海で無理心中、その後は記憶喪失らしい……しかも二回目の。さすがに録画で見ると言うとおかねば教育に悪かるう。ヒスイと結婚……確かにそんなことを約束したな。ヒスイが年頃になったら迫りくるおばちゃんに尻尾巻いて逃げるだろうが今は約束に違いない。どうするか、と思っているとヒスイが如月を諭す声がある。

「如月、無理矢理そのような行為を相手に強要しても嫌われるだけだぞ？メグの頼みを聞いて株を上げるくらいでないと男ぶりは上がらん。」

「う、はい。」

なぜだか最近如月がヒスイの前では素直だ。目をつぶれば侍従関係の様に聞こえなくともない。20も違うのに如月……。

「では、わしと如月が行ってこよう。ほら、カオも如月の活躍に歓心するに違いない。」

「わ、わかった！頑張る。」

……どつちが小さい子かわからん。が、如月が行ってくれるのは助かる。私もサトもメグの母親に顔が知られているし、口先八丁の如月なら何があっても上手くやるに違いない。

私がメグが取って来てほしいものリストを如月に渡しているのを見つめる後ろでサトだけがヒスイを恨めしそうに眺めていたがその時は別段何も感じなかった。

メグは母親に「探偵が調べた月一で会っていた人物が門田カオリとは違って門田薫もんでんかあるという男である」と説明した。母親も道場まで押しかけてサトと勘違いしたのもあってかすんなり信じたらしい。写真の人物が「男」に十分見えたことが私には複雑だがこの際それは置いておく。男友達と会っていたのだから当然母親は別の「女」の影を探すが、ここでメグは架空の彼女と外国へ逃亡したと見せかける航空券をワザとちらつかせて見せた。……母親はメグが今海外にいると思っている。

「メグ、いくらなんでも暫らくしたらばれるぞ。」

「……1、2カ月時間が稼げればいいんです。私は自由になることに決めました。ここで暮らしてみてもこんな私を受け入れてくれる人

ががいるってわかったんです。母は私の見合い相手に申し訳ないと思か思つてません。認めたくはなかったけれど、レールを外れた私は両親には興味がないと思います。父親の息のかからないところで仕事を見つけたら本当のことを両親に話します。」

「決心したのだな。」

「私は私の本質に従います。ここみんなに認められて勇気が出ました。」

メグははにかんで笑った。吹っ切れたようないい笑顔だ。確かに今カミングアウトしては父親の逆鱗に触れて監禁でもされかねない。メグの父親は頭の固い人物だ。メグが怯えているのも厳しい父親の影響が大きいだろう。

「でも、如月さんが行ってくれるとは思いませんでした。私は……嫌われているようですから。」

「……如月はメグを嫌っているというより、メグの立場を嫌っているんだ。」

そついうと隣で聞いていたサトが不思議顔で尋ねてきた。

「幸太郎がメグのことライバル視してるだけじゃないの?」

「もう少し、複雑かな。サトは如月の生い立ちを知っているよな。」

「飯塚病院の相談役の愛人の子供なんでしょ?」

「では、どうして小学3年生の時に引越してきたか知っているか

「？」

「……そういえば、荒れてたとしか聞いてないな。」

「如月と院長の一人息子は同い年だな。小学校が一緒だったので院長の息子に酷いじめを受けていたんだ。それを知った如月の母は如月に泣いて謝ったそうだが自分が愛人だったばかりにつてね。それからこつちに越してから落ち着いていたんだが、高校になったときまた如月は酷い目に合ったんだ。」

「え〜と、相談役が幸太郎のお父さんで院長がその息子だから義兄の子供が同い年？ややこしい。で……またいじめられたの？」

「いや、そうではない。如月は昔から勉強が出来てな。将来は医者になるのが夢だったんだ。」

「へ〜。初めて聞いた。そう言えば賢かったな。あれ？でも薬剤師になったよな？」

「院長の息子がどうしようもなくてな。一度で医学部に入るのは無理で……如月に嫉妬したのか父親に頼んで如月の邪魔をしたんだ。院長は医者になるなら一切の援助を断ると言ってきた。」

「そ、それって酷い！自分が出来ないからって！」

「もっとひどいのは薬学に進んで飯塚病院に勤務することを強要したんだ。だから今でも悪い状況なのに院長の息子がインターンを終えたら不本意でもその下で使われることになるな。」

「別の病院にいったらいいのに。」

「如月は母親を捨てられん。飯塚からの援助だけが警沢を覚えてしまった彼女の生活の頼りなのだから。」

「……。」

「大丈夫だサト。如月は策士であるからな。もう何か考えているに違いない。」

「なるほど、だから私の立場が嫌いだってカオリさんが言ったんですね。私が何も考えずに親のレールに乗ってきたから。」

「如月はレールを外される側だからな。メグはメグなりに苦労していることは如月はわかっている。でも、わかっているも人間割り切れることばかりではない。メグは如月のコンプレックスの塊みたいなものなんだ。どうしても嫉妬してしまうのだろう。」

高校からまた如月は荒れてしまった。でも奴は数か月で戻って薬学部を目指した。あれでいて強い心を持っているのだ。

ふう、と三人でお茶を飲んだ。それぞれがきつと如月のことを想っているに違いない。結局憎めない奴だ。

如月とヒスイが出かけてから午後はのんびりとしていた。メグも仕事のことを出かけて行ったし、稽古も休日ですトの三男トもお昼寝中……久しぶりにゆっくりとサトとお茶を飲んでいた。しかし、

その安らぎのひと時に思わぬ訪問者がやってきた。

「お久しぶりね。カオリさん、サトリさん。」

威圧的な態度は前からなのだが、前にも増しての迫力だ。

「そつちから一方的に絶縁したんじゃ無かったの？今更何の用があるって……よくもまあ、ここの敷居を跨げたもんだね？」

あからさまに嫌な顔をしたサトが対応した。私の眉間にもしわが寄っていることだろう。

「……事情があるのよ。でなけりゃこんなところ、わざわざ私が訪ねてくるわけがないでしょ。上がらせていただくわ。」

しかし引くような相手ではなく、勝手に応接間まで入ってきた。最近お客は遠慮がないらしい。

「ふん、あの鬼婆の指図かなんかでしょ？取り敢えず、私たちを巻き込まないでよ。ほら、帰れ！」

ぐつと言葉を堪えてサトを睨んでいるこの黒髪の美しい娘の名は「しばやまりおん柴山璃音」という。私たち姉妹のハトコと言ったらいいのかバア様の妹の孫だ。どうしてだかは知らないが柴山家は代々女主人が受け

継ぐらしく、バア様は大切な長女だった。ジイ様はそんな大事な跡取り娘のバア様と駆け落ちし、そちらの一族から私たちは総スカンをくらっている。あっぱれ、ジイ様。両親が亡くなって私たちを引き取るかどうか打診されたときも「汚点である娘の孫は無関係である」とはつきり言い、絶縁を宣言するような一族だ。今思えば年端もいかぬ子供に酷い言葉だが。

サトが二十歳を過ぎた時に一度だけ私たち姉妹は本邸に呼ばれたことがある。由緒正しそうな古く立派な日本家屋で裏山の崖のようなどころに隣接された神社さながらのつくりだったのを覚えている。そこで私たちは半ば強制的に祖母の妹にあたる柴山家当主に財産放棄の書類に判を求められたのだ。そんな強引なやり方をしなくとも持って来ればいつでも判などついたというのに。……まあ、そんなときに盛大に最後まで律儀に私たちを罵倒し続けたのがこの璃音で、サトが目くじら立てて追い返そうとしたとしても当たり前前の人物なのである。

「お茶ぐらい入れてくださっても良いじゃない？ 飯にも親戚なんだから。」

「何言ってるの？ 頭でも打った？ 「元親戚」。今はまったく赤の他人。」

「……血統は変えられないわ。」

「はあ？」

「サト、お茶ぐらいは入れてやれ。璃音も飲んだら帰ってくれ。悪いが聞く耳もたん。」

「ふん。」

サトが思い切り出がらしのお茶をジイ様が愛用していた歴代首相の顔のついた湯呑になみなみと入れた。因みにこの湯呑、首相が変わるたびにジイ様が買い足して5、6個は家に転がっている。最後の方は「もう、買わん。」とジイ様は怒り出していたが。

「単刀直入に言いますと、カオリさんを本邸の方に招待するよう母に言付かりました。」

ようやく席に座れた璃音が意を決してサトの入れたお茶を飲み干して言った。

「ばっかじゃないの！行くわけないじゃん！」

「もう、決まったことです。」

「それは、どういっ……。」

「また、強引につれて行くっつたっれ、そっはいからいっ……れれ？」

サトの言葉尻が揺れる。

「別に、了承を取っていくつもりはありません。」

「ら……らりを……??？」

呂律が回らなくなったサトの非難の声を聴きながら私の目の前の世

界が……

ぐにゅりと揺れた。

闇を操る一族（前書き）

お待たせしました。先に話を進めるか悩んで先に進めることにしました。

今回ちょっと長いです（汗）

闇を操る一族

目覚めたのは井草の匂いがする畳部屋の布団の上だった。

少々頭は痛むが意識ははっきりしている。どうやら柴山の手の者にどこかへ連れて来られてきたようだ。こめかみを押さえながらそろそろと起き上がると部屋の全貌が見えた。置かれている調度品は高級なもので漆塗りの座敷机に飾り棚にも美しい細工が施されていた。どこかの豪商の姫の部屋のようにも見えるが部屋の中央には壁掛けタイプの最新の液晶テレビが置かれていた。

……しかしなんだろう。この重々しいこの部屋の空気は。

ああ、サトはどうしただろう。一緒に連れられてきたのだろうか。

私は気軽な独り身だが、あの子は違う。私と同じように連れてこられたりしたら困る。

ふらふらしたが立ち上がって部屋を見る。部屋はテレビのついた中央の部屋と左右に一部屋づつ襖で遮られるようだ。襖は開いている。ドアは3つ。一つはお手洗いでもう一つはバスルームになっていた。外につながっていると思える最後の扉には予想通り鍵がかかっている。

私を閉じ込めて何をしようというのだろうか。

そう思いながら左の部屋に入ると背後に気配を感じた。

ドクン……

全身の感覚がそこに集中する。感覚がまだ鈍いのに鳥肌が立ったの

がわかる。

ドクン……

開けてはいけないと頭のどこかで警鐘が鳴る。

しかし、私の手は止まらなかった。伸ばした腕で掴んだのは白いカーテン。窓かとはばかり思っていた先に有ったのは冷たい岩が露出したところに嵌めてある重々しい木でできた古い格子……。

それはまるで牢獄だった。

「どんな女かと来てみれば、随分 臺^{とう}がたつた女だな。」

目覚めてから数分経ってふらりと現れた若い男が私の批評をする。長い前髪が五分分けされて、その間から切れ長の目が蔑みながらこちらを伺っている。黄色と黒のチャンチャンコが似合いそうだ。

「初対面の年上の者に対する態度ではないな。私は好きでここにいるわけではない。すぐに帰してもらおうか。」

「生憎それは出来ないな。俺だって嫌だが今日からあんたの世話をしなくちゃならない。」

「……。何が目的かわからぬが、妹をどうした？サトは無事なのか？」

「ああ。必要なのはあんなだけだから。あんたしか連れてきてないぜ。」

その言葉で心底ほっとした。が、某漫画の主人公のような髪型の男が私の世話…というのはなんだ。

「世話はいらぬ。すぐ帰らせてもらうからな。」

「はっ！ここは核シエルターみたいなところなんだぜ？あんたは監禁されてるんだ。外からじゃないとここは開かない。」

「すると？」

「そうだよ。俺も閉じ込められてんだよ。」

「では、質問を変えよう。あのカーテンの向こう側にある物はなんだ？」

「……。時間になれば分かる。」

「あれのせいで私は連れてこられたのか？」

「ふん。おばあ様さえ亡くならなければこんなことにならなかったんだ。」

イライラとした様子で男が答える。

「おばあ様とは、柴山家当主のことか。いつ亡くなったんだ？」

「うるさいよ、あんたは黙ってアレの相手をしてりゃあいいんだ。」

「あれ……とは……。」

ちらりと男は白いカーテンを見ていた。男はここに来るとまず初めに白いカーテンを丁寧に重ねて閉じた。間違いなくあそこには何かいる。目の前の男も怯えている何かが。それ以上は男は何も言わなかった。結局名前も教えないので勝手に「キタヲ」と心の中で呼ぶことにした。

数時間経ったときカーテンの向こう側からズルズルと何かが摩れる不気味な音がし始めた。

それまでテレビを見て過ごしていたキタヲが両手で頭を抱えて震えている。やがてドシンと木格子にぶつかる鈍い音が繰り返された。

その度に部屋が揺れる。

何度目かの音で部屋の電気は全部ショートしたのか真っ暗になった。

目が慣れてくると暗い部屋の中に薄く白いカーテンが浮かび上がる。カーテンレールがカタカタと揺れていた。

「ひいひい。」

キタヲは震えたまま動かない。 何かが……居る。

……に……せて……

ここから……だし……て……

だせ……だ……せ……

「おい、キタヲ。何かが出せと言っているぞ！」

話しかけるがキタヲは恐怖のせいでまったく聞こえていないようだ。

「いやだ……なんで俺が……。なんで……。ひいいい。」

背筋が凍るような声が続く。「ここからだせ」と繰り返しているよ
うだ。

心臓が鷲掴みにされたように苦しい。息が辛い。なんだ……これは
……。

震える両手で白いカーテンを掴む。

ここだ。

ここに 何かが いる。

「あ、開けるな！」

後ろでキタヲの悲鳴のような声が聞こえた。しかし、それは聞いてはやれん。私には知る権利がある。

勢いでカーテンを思い切り引っ張った。

カーテンがレールを滑っていく。

威圧感に押されながら私は両腕を抱きしめながら格子の向こうを見つめた。

そこにはぼんやりと白く浮かぶ何かが居て、

その血のような赤い目が私を射抜くように見えた。

私に気づくとぼんやりと白い霧のような物体は私にめがけて凄じ勢いでやってくる。私の体は金縛りに有って動けない。この霧のような物体は幼少のころから私は見ることが多い……霊体だ。どうやらこの格子からは出られないようで向こう側で私のことを窺っているように思えた。

私は小さいころからこの力が怖くて怖くて仕方がなかった。母は私に似たのだとよく嘆いていた。それもあって親戚が私たちを毛嫌いだのかもしれない。ジイ様に受け入れられて「合気道」に出会い、私は自分を保つことを学んだのだ。

……に……

……ど……う……？

やくそくは……

意思をはっきりと伝えてくるような強い力の霊体に有ったのは初めてだ。何かを、探しているようにも思える。約束とは、なんだろう。考えることは出来ても動けない。霊体は何かを追い求めるようにぐるぐると格子の中を回り始めた。

ボーン　ボーン　ボーン

その時、三回掛け時計が鳴る音がした。急に霊体は格子の奥へ消えていく。
と、同時に金縛りが解けた。

「かはつ。ゲエホ、ゲエホ。」

後ろにいたキタヲが息を吸い込んでいる。

「カーテンを勝手に開けんじゃねえよ！」

「しかし、私は何の説明も受けてはいない。怒られる筋合もないと思うが。」

「くそっ！ごちやごちや言いやがって！」

「今のはなんだ？あそこに閉じ込めているのか？」

「……ふん。やはり、聞こえるんだな。あの声が。」

「どづいづいとだ？」

「柴山には長女により濃く受け継がれる能力があるんだよ。おばあ様は辛うじてあの声が聞こえていたが、その娘や孫は聞こえない。つまり、おばあ様が死んだらアレの相手する奴がいなくなる。元々はお前の祖母が逃げ出したからこんなことになったんだ。ちゃんと相手さえすればお前だって贅沢し尽せる。悪い話じゃない。」

「……………」

「不満そうだな。……………だが、お前に俺の子を産ませるって手もあるんだぜ？もちろん娘だ。」

話しの全貌は見えないが、どうやら私の貞操の危機らしい。簡単には組み敷かれたりしないが、薬を使われると厄介だ。

「相手をすれば贅沢できるということは柴山はそれで潤っているということなのか？」

「正解。アレは金の生なる木だ。」

少し落ち着いたのかキタヲはそう言い捨ててまたテレビをつけた。お笑い番組を見て何とか気を紛らわせようとしているキタヲが私をどうこうするとは思えなかった。キタヲはせいぜい二十歳ほどに見えるし、はつきり言ってお子様だ。女の血統だけを重視するなら一族の息のかかるものなら誰でもいいはず。と、するとただの見張り役に過ぎないのではないだろうか。

柴山の家では「何か」を閉じ込めている。その声を聞けるものが女の直系の第一子。

その声を聞いて……………。

何をするというのだろうか。

きっとバア様はそれが嫌だったに違いない。そして、ジイ様と駆け落ちした。ジイ様ならそうしてくれると思っただからだ。そんなバア様が嫌がったことを私がやれるとは思わない。変わり者だったが芯の通った懐の深いジイ様がそうしたのだ。

ふと、ヒスイはどうしているのかと頭によぎる。

何かあればサトが面倒を見てくれるだろう。

だが、きっと不安でいっぱいだ。せつかく随分打ち解けてきたというのに。

私が「捨てた」と思ったりしていないだろうか。賢いとはいえまだ小さい。心の傷は十分に癒されていないはずだ。

抱きしめてやりたいな。

ああ。愛しいとはこういうことなんだろうか。

なんとなくヒスイのことを考えると心が落ち着いた。早く門田に帰ってヒスイを抱っこしてやろう。

私を必要としてくれるあの温もりが恋しい。

それにはキタヲから色々と聞きださねばならない。

朝、なのか時間の感覚がない部屋でキタヲが食事を運んできた。食事は専用のエレベーターで下されるようだ。あんなことは言っていたがキタヲはソファで寝ていた。持久戦になる恐れもあるなら私も睡眠と食事はしっかりとらなくてはならない。但し、また薬を使われるのは困るので私はキタヲが口をつけた食事を奪って食べることにした。

「ふん、何にも入いっちゃいね〜よ！俺を毒見役にしやがって……。」

「今度はそちらを寄越して貰おう。」

「……なんだよ。まったく。」

文句を言う割には素直に食事を毒見してから手渡すキタヲ。性根が悪いわけではなさそうだ。

それとなくキタヲに話を聞き出そうとするが、口止めされているのか何も話さなかった。私の産む娘が欲しいとするとその父親になる男は次期柴山の当主の父親という位置が約束される。……キタヲはそんな野望を持ってここにいるとは思えない。だったらきつとただの監視に過ぎないのだ。今のうちに逃げる事が出来ればいいのだが。

そんな事を考えたところから出れる術はない。焦る私の前に一人の男が現れた。

「高瀬さん！どうしてここに？」

キタヲが私には絶対に見せない態度で「高瀬」と呼ぶ男に駆け寄り行った。

「なあに、その御嬢さんに頼みごとが有ってね。」

高瀬という男はがっしりとした40代前半に見える男だ。色が黒く彫りが深い。たれ目が優しい印象に見えるが一癖あるのはアリアリとしている。高瀬は私に何か書かれた表を渡す。

「これは？」

「祠の神様に聞いてほしいリストだ。」

「ほくら？牢獄の間違いではないのか？かみさまって？」

「赤井が説明しなかったか。あそこの……檻に入ってる神様。声は聞けるんだろう？赤井から聞いている。」

「仮に神様と呼ぶとして神をあのようなところに閉じ込めて何をしているのだ。」

「あんたは大人しく俺の言うことを聞いていればいい。聞けないなら方法を考えるがな。」

ダメだ。この男は危険だ。己の欲望に忠実で人の命を命と思わない。男が渡してきた紙には証券会社の名前と銘柄らしきものが数十件書かれていた。なるほど「神」は先見の力があるらしい。

「上がるかどうか聞くわけか。」

「察しの良い女は嫌いじゃないぜ。ついでにあんたには俺の子を産んでいただきたい。」

「……………」

静かに男を見据えた。高瀬は挑戦的に私を眺めていた。何を答えたところで私の運命を握っているとその眼が言っている。

私の額から一粒の汗が流れ落ちてきた。

カミングアウト

「ぜったい！お、お茶に薬を仕込んだ！あの女！」

ええ、ふらふらするよ。でもね、母性本能舐めんなよ！トモの泣き声で何とか覚醒したんだから！でもこれ、大丈夫なの？おっぱいあげてる母親に飲ますか？普通！なんかトモに障害でも出たらあの家焼き討ちしてやるからな！な、涙出てきた。

「幸太郎！この薬大丈夫なの？なんなの？カオちゃん連れてかれるし！ど、どうしよう！すごい嫌な感じかしない！幸太郎！カオちゃんを連れ戻して！」

「ちよ、サトリ、落ち着いてよ。今、俺たち帰ったばかりで状況が掴めないよ。取り敢えずはヒスイがヒロたちを迎えに行ったから。」

頭を抱える私の背中を幸太郎が擦った。頭がガンガンする。さつき幸太郎とヒスイが帰ってきたけど、あの女が来てから2時間は過ぎている。初めからカオちゃん一人を連れて行くことが目的だったんだ。私たちを歓迎していない璃音だったら警戒されていないことを読まれていたに違いない。でも、どうして……。あの一族にとって私たちは絶縁したい存在なだけなはずなのに。

「どんな薬かはわからないけど、授乳はやめた方が良いよ。サトリはどのくらい飲んだの？」

「私は口付けだ程度だよ。含んだ程度。でも、カオちゃんは一口くらい飲んだかもしれない。」

「変な味しなかった？」

「うう。私、腹立ててたから思いっきり濃いお茶出したかも……。」「こんな事なら湯呑を差し出したカオちゃんに出がらしのお茶を足したりしなかったのに！」

「ただいま。どうしたんですか？」

そこへ玄関の方からカバンを抱えたメグちゃんが顔を出した。

「うう。メグちゃん……。」「

「とにかく、まだだるいだろ？布団引いてやるから。」「

幸太郎が言ってくれるのは有り難いけどのんびりしてる場合じゃない。

「駄目よ、幸太郎。カオちゃんが連れて行かれたのは普通の家じゃないの。伏魔殿よ。悪魔の城なんだから！」

「……わかった。話が先だな。」「

「え……カオリさん？連れていかれたって？」

「おかゝさゝん。ただいま。」「

のんびりとした息子たちの声が土間に響いた。ヒスイと帰ってきたのだ。

ガンガン痛んで回らない頭を回転させる。悪い予感が私の心臓を高

鳴らせた。私たちは勘がいい。
……それはあの一族の特徴なんだ。

大事な話があるとヒロたちは奥の部屋で映画鑑賞させることにした。カオちゃんのことなのでヒスイも話に参加する。

「話はジイ様がバア様と駆け落ちした時から始まるんだけど……カオちゃんを連れて行ったのは柴山の間でバア様はその家の長女で跡取り娘だったの。なんでも長女が家督を受け継ぐ家系らしくてね。ジイ様と駆け落ちなんてしたもんだから当時は大騒ぎだったらしいよ。でも、妹が家督を継いでその話は収まったのよ。私たちは絶縁されて、遺産放棄もした。もう、関係ないはずなのに……。」

「カオは連れて行かれた。」

頷く私とヒスイの目が合った。

「カオリが連れて行かれる目的が見えない。なんか他に心当たりは？」

幸太郎の質問に言葉が詰まる。私たちが人にあまり言えない事。

「柴山の家系は女の人に……特に長女に受け継がれる力があるの……。」

「？カオリたち姉妹が「勘」が良いってこと？」

「うん……。そう言ってるけど、本当は第六感の方が強い。その、
霊的なものが見える時がある。」

「……………」

「でも、だからって何の役に立ってことは無いよ？この部屋、昔
なんかあったな〜とか分かるくらいで。私たちの母親も「勘」は良
かったけど、事故は防げず……亡くなったから。」

「だからカオリは前の事件の時真っ先にあの部屋に行ったのか。」

「あの時、私もカオちゃんも確実に何かを感じた。あの家の二階に
は何かあるって。カオちゃんは私よりもそういう力があるし。」

「……………何らかの理由でカオのそういう力が必要になったのが理由か
？」

「わかんないよ。でも、他に接点は浮かばない。ねえ、法的処置つ
て通用しそう？」

「今のところ、何とも。行く先もわかっているなら難しいと思いま
す。」

「事件性があるってお茶だけじゃ立証されないのかな……………」

「変に騒ぐといらぬ詮索までされるんじゃないか？俺たちが身動
き取れなくなったら？」

「……………」

顔を見合わせた私たちにヒスイの声が届いた。

「他に任せるより先にカオの居場所が分かるなら迎えにいこう。」

ヒスイはまっすぐに私を見ていた。……吸い込まれそうな瞳。もっともこの場で力強い言葉だった。

「OK。じゃあ、メグはサトリと柴山家を調べてよ。俺はカオリを迎えに行く。」

幸太郎が指示を出すとメグが頷いた。

「如月、わしも連れて行け。」

「サトリが良いって言ったから話には参加してもらったけど、危ないかもしれないからヒスイはここに残って。」

「……。黙っていたがわしは幼子ではない。違う世界から来た中身は大人だ。カオさえ強く願えばカオの元へ行く術もある。」

「はあ？」

幸太郎が大口をあけた。そりゃ、そうだ。ここでカミングアウトとはヒスイらしいよ。

「サトリ殿。なにか武器になりそうなものは無いか？ わしは体が小さい分不利だが剣術には自信がある。」

「ふえ？ 剣？ 鬼丸はあるけどあんなもん持ってたら銃刀法違反だよ

……。」

「懐刀でよい。」

「う。確か鬼丸の近くにあったかな。」

「見せてくれ。」

「ねえ？なに、普通に会話してるの？サトリは納得してんの？その……。」

「ヒスイの中身？こんな世間慣れした幼児いる？大人の方がしつくりくるでしょ？」

「確かに、思い返せば目をつぶれば大人ですね。」

メグちゃんの方が順応性がいいのかうんうん頷く。

とにかく危ない家に行くのだからヒスイの言うのも一理ある。自分たちの身勝手で誘拐する連中なんだから。

私は鬼丸の仕舞ってある部屋にヒスイを案内する。ぞろぞろと男二人も付いてくる。ああ、でもあれ、気持ち悪いからヤなんだよな。

ここ最近カタカタ鳴りだした気持ちの悪い箱の横に手を伸ばそうと

したとき、ヒスイが鬼丸が見たいと言い出した。

「ちよゝ嫌なんだけど、ヒスイくん。」

「サトリ殿、その箱をこちらに。」

おいおい、いくらヒスイが気に入っても鬼丸は持たせないぜ。

「ホント、見るだけだよ。」

「……。」

黙って頷いたヒスイが鬼丸の箱を手にしたとき、わかりやすいほど箱がカタカタと揺れた。な、なんだ？
蓋を取ったヒスイが鬼丸を見つめた。

「お前もこちらに来ていたか。……琥珀。」

そう言うヒスイが指で何かを描く。鬼丸はカタカタと震えながら白く光りだした。

「な、な、なんなの!？」

驚いて声を出した私と呆けてみる残りの二人。光はどんどん大きくなつてやがて消えて行った。

……その大きな黒い影を残して。

「翡翠さま！」

大きな光の後で現れた身長二メートルは軽く超えているだろう大男がヒスイにすり寄る。まるで、大型犬だ。ただ、その姿は異様で……まるで

「お、鬼……？」

私たち腰を抜かしたと思える3人などまったく気づいていない風なその大男の顔は目の周辺に赤と黒の縦に走る刺青があり、眉毛がほとんどない。頭はスキンヘッドで角らしきものが3つほどついていた。プ、プロレスラー……。つてか、なんだあれ！？ただ、着物はヒスイが初めてここに来た時のものに良く似ている。

「こんなお小さいお姿になって……。」

鬼はおいおいと泣き出した。……泣き上戸かよ。

「琥珀。苦しい。すこし、離れる。」

ヒスイが困った顔でそう言うと鬼が離れて片膝をついた。

「翡翠さま、御傍に居ながら参上が遅れて申し訳ありません。何度かこの家の主人とは顔を合わせたのですが、身動きも取れず……。」

「ひ、ヒスイくん？……だ、誰それ？つてか、なに？」

ずっと大口開けていた幸太郎が言った。よ、よく言った幸太郎！

「ああ。わしの幼馴染で、わしの世界ではわしの従者をしていた、琥珀こはくという。姿とは反して心優しい男だ。」

平然と話すヒスイに絶句した幸太郎の目が「痛い子だと思ってごめん」とヒスイに語っていた。

「翡翠様、この者たちは？」

探るように鬼がヒスイに尋ねる。

「ここでの生活でわしを支えてくれている者たちだ。」

そう答えるヒスイに鬼はホツとしたようだった。危害を加えている様でもあれば喰ってやる的な目をしてるよね。こわっ！

「さ、左様ですか。……翡翠様をお守りするは私の務め。今までよくぞ無事に守ってくださった！」

大きな体を半分に折った鬼は丁寧に私たちに頭を下げた。

「い、いやいや。守ってって、大袈裟なこととはしてないから……。」

正直、怖いからあっち行ってくれ。

「ヒスイくんって従者が付くような身分なの？」

……。そういやなんかいつてなかったか？しかし、幸太郎、よくこの状況で質問出来るね！

私がそう思うや否や頭を下げていた鬼がヒスイを黄門様のように紹

介した。

「ここにおられる翡翠様は水の國の第二王子である。そなたたち、少し、馴れ馴れしいのでは？」

「それは、よい。琥珀。それより急ぎの用がある。その姿では目立つから変化しろ。」

「し、しかし。翡翠様……。」

「いいから、変化せよ。」

「……翡翠様、どのような人型に？」

「そうか。……サトリ殿すまぬが琥珀に人物像を送ってやってくれぬか。琥珀はその姿になれるゆえ。」

「へっ!？」

私が答える前に鬼が私の手をそつと両手で挟んだ。それだけでも血の気が引いた私に考える余裕があるわけなかるう!？ええ〜と、な、なんなの!？

「……。」

そう思って前を見ると、さわやか青年が白い歯を輝かして笑っていた。そ、そうか、私が想像した人物像になれるって事だったのか!

「し、シウオン!」

「……………」

「……………」

ガッン！

次の瞬間幸太郎のゲンコツが私の頭に見舞った。

「な、何すんのよ!？」

「サトリ!お前!いまどき人気絶頂の韓流スターにしてどうするつもりだ!?!これで電車乗ったら目立つだろうが!」

「!で、電車に乗らなきゃいいでしょ!」

いや、でも目立つのは目立つ。だっていきなり言うもんだから!

「……………」
「だったら幸太郎がやればよかったじゃん。」

鬼にいきなり手を握られてこっちだって心の準備がさあ!

私の声を聞いて鬼が幸太郎の手を握ったのが見えた。さぞかし平凡な姿の人でしょうねえ……………」

「……………」

「……………」

ガッン!

今度は私が幸太郎にゲンコツを見舞う。

「な、なんだよ！」

「ばか！幸太郎こそAMB47の「みつたん」想像してんじゃないわよ！」

目の前には短いチェックのスカートの制服を着たアイドルがキョロキョロしている。

「……翡翠様。どうすれば……。」

……こ、声は鬼のまんましゃがれたままだ。横の幸太郎が狼狽した。あの顔でそりやないよね！……私たちのやり取りを見てヒスイが困った顔をした時、黙っていたメグちゃんが口を開いた。

「ヒスイくん。ヒスイくんのお父さんの姿になってもらったらどうです？ヒスイくんの親戚って設定ならいろいろ便利かもしれないですから。」

「お、お、お、大殿のお姿など！恐れ多い！」

「……。」

それを聞いたヒスイは少し何か考えていた。

「父上でなく、兄上になれ、琥珀。わしに考えがある。……サトリ、すぐ用意してほしいものがあるのだが。」

用意するものをヒスイに耳打ちされて私は目を見張った…。

「そ、それってどうするの?」

「わしが使うに決まっている。きっとカオの守りとなる筈だ。」

一瞬変態かと思っただがヒスイの目は真剣だった。

……わ、わかった。すぐに用意するから!

私はヒスイに指定されたものを取りに自分のマンションへと走った。

カミングアウト（後書き）

え〜。韓流スターと某アイドルは架空の人物です。アシカラズ。突っ込まないでくださいね（汗）

狂気の男

「そうだな。今からでも構わないんだぜ。」

ニヤリと高瀬という男は私を見た。その視線は私の女を目踏みしているようだ。いかんせん生まれてこの方そっちの方面で誘われたことなどないが。

「断る。」

私は即答したが高瀬はそんな私の言葉など聞いていないようだった。

「……まあ、あんたが無事にアレから情報を聞き出せるかはつきりしないと抱く意味もない。」

「……。」

「しつかり仕事が出来れば……うんと可愛がってやるぜ。」

高瀬はキタヲにメモを渡しなすと一つしかないドアの向こうに消えていく。ドアの向こうにも何枚か扉があるらしく、ガチャン、ガチャンと鍵のかかる音が響いた。私に勝機があるとすれば奴が私を見くびっていることぐらいだ。しかし、此処は逃げられる場所ではない。下手したら……廃人が殺されてもおかしくないだろう。それほどまでにあの男は危険だ。何とかしてここから出る糸口がないだろうか。

私の気持ちが焦ろうと時間はただ過ぎていく。

「キタ……赤井。そろそろ時間だが。」

「……。いいか、アレが出てきたらこう言うんだ。『お教え願いたい。さすれば約束も守ろう』とな。紙に書いてあるものを後は読み上げればいいんだ。」

「約束とはなんだ。祠の主はここを出たがっているが。」

「そんなの、聞かされてねーよ。あんたは俺たちの言う通りにすればいいんだよ。」

「キ……赤井という名ということは柴山の親戚筋ではないのか？」

「ちつ。俺は璃音の異父兄弟なんだよ。どうでもいいだろ？」

「それでは私の従姉弟いとこになるのか。」

「知らねーよ。もう時間だ。」

キタヲは私との会話を極力避けている。裏を返せば私と馴染みたくないのだろう。馴染めばそれなりに私に対しての非道な行いも見るに堪えなくなるに違いない。祠の主が現れる時間になったのでキタヲはメモを私に渡すと自分は隣の部屋へと逃げ込んだ。女の方にこの力が遺伝することだが、キタヲも柴山一族の一員ならこの祠の主に人一倍恐怖を抱いているに違いない。それほど祠の主は只

者ではないのだ。

途端、部屋に冷気が漂ってきた。

今、この主の声が聞こえるのが私だけなのならこの主に何か聞き出せないだろうか。

恐怖よりも確かな決心が私の背中を押しした。ずるりずるりとまた何かが擦れる音がすると昨日見た赤い瞳が格子の向こう側に現れてきた。

……約束……

……愛し子に……

……ここから……だして……

昨日と同じようなセリフが繰り返される。私は全身に鳥肌が立つのを感じながらその声を頭の中に入れた。話し方を考えるとどうやら主は女の人の様に思えた。

「愛し子とは？」

……私の……子供……

「貴方は子供に会いたいのか？」

……それが、約束……

「ここから出れば貴方は子供に会えるのか？」

……わからぬ……

……しかし約束は果たされていない……

……この祠の封印された岩を退けなければ私は出れない……

「貴方をここから出せば私も出して貰えるか？」

……昔そう言った人間がいた……

……だが、もう一度戻ってくることは無かった……

「もしや、その人の名前は……。」

「なにをしてるんだ!!」

私がバア様の名前を出そうとした時、キタヲの金切り声が聞こえた。どうやら隣の部屋で聞き耳を立てていたらしい。何をもって

「話を。」

「お、お前は、お、俺たちの言う通りにしていればいいんだ!ど、どうなっても知らないぞ!高瀬さんを怒らしたらお前もお前の妹の家族も皆、皆!!!!お前の両親みたいに!!」

「え……!?!」

「あ……。」

キタヲが慌てて口を押さえるがもう、遅い。

「……私の両親が何て？まさか……。」

「……。」

「事故じゃなかったのか？」

「……。」

「答える、キタヲ。高瀬が両親を？」

怒りに背筋がゾクゾクと震えた。あの日、「行ってきます」と笑って出かけて行った両親。突然熱を出したサトの看病に残った私。ついて行ったら私たちは……死んでいた。

「答える。」

私の声にキタヲが震える。目を逸らすこともできないキタヲの姿が揺れる。なんてことはない、泣いているのだ、私が。もう祠の中の存在の為に体が強張っているのか自分の中から湧き出る感情でそうなっているのかわからない。ただ体の奥が震える。

泣きじゃくるサトを抱えてぼんやりと音の響く斎場で両親が灰になっっていくのを待った。サトの頭を撫でていないとサトまで失ってしまいそうな不安に襲われた。遅れてきたジイ様に抱きしめられたとき初めてワンワンと泣き出した私をサトはポカンと見ていた。

母は「行ってきます」と言ったのだ。行って帰ってきますと。

元々身寄りのなかった父と母は職場結婚だったらしい。役場で係長だった父と専業主婦になった母。父は口数は少なかったが温厚で優しかった。母は反対におしゃべりで楽しい人だった。いつも母に押しつけがましい父もここぞという時にはしっかり家族を引っ張って行ってくれていた。

どこにでもある幸せな家庭。

それが当たり前だった。

あの雨の日までは。

突然鳴った不吉な電話。

その日は家族で母の知り合いが開いたという山の上の喫茶店にお祝いを兼ねて行くことになっていた。簡単なパーティも有って招待状も貰っていたが朝から皆で用意していたら突然サトが朝食を全部吐いてしまった。幸い熱はたいしたこと無かったがそんな体のサトを連れて行けるわけもないので困った両親が私に留守番を頼んだんだ。昼過ぎには帰ってくると言った両親は自家用車に乗って雨の中に消えて行った。

そしてそのまま……二度と帰ってこなかった。

あの日の絶望感が甦る。体が震えて考えがまとまらない。

雨でスリップしてガードレールを突き破って車が落ちていたと後から聞いた。

安全運転だった父にしてはスピードを出していたと……。

あれが事故でなくて意図的な殺人であったのなら……

高瀬を……柴山を私が許せるとは到底思えない。

怒りに震える私と恐怖にブルブルと震えるキタヲ。

いつの間にか時間が過ぎていたらしく、祠の主との面会時間が終わってしまっていた。

あれからキタヲも何も言わない。

きつともうすぐ高瀬が確認にここへ訪れる。そう思った私の予想通りにガチャリと鍵の開く音がした。

「なんだ？俺が来るのを心待ちにしていたようだな？」

甘く、高瀬が私を見て笑うが目が笑っていない。

「お前は私の両親を殺したのか？」

真つ直ぐ高瀬を見ていた私が静かにそう告げると高瀬の右眉が上がった。

「……赤井がしゃべったのか？」

「た、高瀬さん！そ、それは！……グハツ！……」

高瀬が赤井を一瞥すると同時に腹を蹴り上げた。

「つたく、役に立たねえなあ。このお坊ちゃんが！」

壁際に転がったキタヲを高瀬は容赦なく何度も蹴り上げる。許しを請うように怯えて見つめるキタヲを楽しむように高瀬が痛めつける。これが高瀬の本性なのだ。高瀬の足が上がる度にキタヲの体が宙に浮いて壁に打ち付けられた。

「やめる！」

ゲホゲホと咳き込むキタヲを見て思わずそう声をあげると面白そうにキタヲの片腕を踏みつけながら高瀬は私の方を見た。

「……あんた、お人好しだな。こいつだって柴山の関係者だぜ？俺にお前さんの両親……いや、ほんとは家族全員を殺すように依頼したのは柴山だっていうのに。」

「何の為に……。」

「何のためだあ？……金の為に決まってるだろ？柴山の現当主ヒサノはお前たち家族に柴山の家を乗っ取られるのが怖かったんだよ。自分の力が弱いつて分かってたからな。おまけに一人娘は能無しだ。」

「……………」

「璃音に能力が無いと分かるとお前たち家族が疎ましかったんだよ。5人ほど男を選んで子供を作ってもやつとできた女は璃音ただ一人だ。あの時はまだ柴山は婆様が仕切っててお前たちの母親に家に入るよう裏で動いてたからな。その場しのぎは上手く行ったんだ。婆様を薬漬けにして言うこと聞かせてヒサノが柴山の实権を握る…。けど、婆様が死んだ今、誰もアレの声がきけねえ。あの時は全員殺せなくてしくじったと思ったもんだ。でも……………生かして良かったぜ。でなければアレが居たって金は産まない。」

淡々と話しながら高瀬がキタヲの腕に乗せていた足に力を入れた。

「ぎゃあああああああ！！」

ポキリと嫌な音がすると同時にキタヲが叫び声をあげる。

「やめろ！」

「ははっ……………あんたは自分の心配をしてるよ？大人しく言うこと聞いてりゃいいんだよ。痛いのは嫌だろう？それとも激しく犯されるのが趣味か？それなら俺も得意だぜ？」

高瀬の言葉に握った拳が汗をかく。悪魔のような男が私を見下していた。

「おっと。あんたが武道の有段者でも俺もそれなりに鍛えてるんでね。セミプロだぜ？これでも。」

高瀬がおどけながらも繰り出したパンチ……ボクシングか……。

「まあ、俺も子供を産ませるならあんな婆さんよりあなたの方がいい。若いだけなら璃音で十分だしな。」

パチン！

私の顔に手を伸ばした高瀬の手を払い、高瀬を睨みつける。床に転がっているキタヲは腕をかばいながら呻いていた。

「おお、怖い。この状況で威勢が良いねえ。あんたが俺に服従した時のことを考えるとゾクゾクするぜえ？」

「お前に服従する気はない。」

「みくんな、最初はそういうのさ。でもな、一度味を知っちまうと逆らえなくなる。」

「な……なにを。」

「柴山の婆さんだっけ初めは抵抗していたぜ。ああ、でもあなたには子供を産んでもらわないとなあ。」

妖しく笑いながら高瀬が私との距離を詰めてくる。

後ろ脚を引きながら私は高瀬の動きに構えを取った。

狂気の男（後書き）

カオちゃんピンチ……。。

敵陣へ

数時間かけて電車で移動し、そこからは車でカオが連れられたという家に到着した。重厚な門構えで塀が高く積み上げてある上に忍び返しが付けられている。その異常な雰囲気の様は自らを守るうとしているのか逃げ出すものを抑え込んでいるのか。どちらにしても家主の後ろめたさが出ているようだった。

如月が小箱を押すと音が鳴り、やがて向こうからすこし震えた女の声が聞こえる。

「……どちら様ですか？」

「門田もんでんの関係者です。こちらに門田カオリさんが居るでしょうか？」

「……そう言ったお名前の方は存じません。」

「居るはずですよ。」

「……。」

ブチッ

「あ、こら！カオリを出せ！」

一方的に通話が切れたようで如月が声を荒げて箱に向かって怒鳴る。

「チッ、だめか……。」

「如月、上に目が有る。あれはなんだ？」

さつきから視線が気になるが人の気配がない。塀の上で無数にあちらこちらを向いている黒い筒のようなものが気になった。わしが前を向いたまま質問すると如月はちらりとソレを見て靴ひもを結ぶふりをして隣でしゃがむとわしに教えてくれた。

「あれは監視カメラって言って中の人間が機械を使ってこっちを伺ってるんだよ。」

「ふうん。」

では、わしの姿は向こうには見えているということか。

「如月、わしに合わせれるか？」

小声で言うと如月は不思議そうな顔をしたが次の瞬間少しだけ口の端をあげた。

「カオリの為ならなんだってするさ。」

そうだな、如月。わしもそのつもりだ。

昼間はあれで退散したがもちろん帰るつもりはなかった。

如月はすぐに近くの宿をとった。忍び込むとしたら夜の方が良い。帰ったと見せかけて琥珀を鼠にして侵入させた。情報を持って帰ってくるのを待つ。カオは必ずあそこに居る。如月もわしと同様の意見だった。

こ気味良い音が鳴って如月が携帯電話を取った。

「ああ、メグ。……うん。多分間違いないよ。サトリもそう言うてるんだろ？……うん。で、なんかわかった？」

半時ほど話して通話を終えた如月は眉間にしわを寄せてわしに向き合った。

「良くない話か？」

「ああ。」

如月は宿で寢床が二つある部屋を取った。「ツイン」という部屋らしい。お互い寢床の上に座り顔を見合わせた。狭い部屋では座るだけでも膝同士が触れそうだ。

「柴山家には暴力団の男が出入りしている。こちら辺りはみんな柴山の息がかかっていて柴山はまるで城主みたいに力をふるっているらしいよ。きつと僕たちがここに泊まったのもお見通しだろうね。」

「暴力団……とは。」

「悪いことを生業なりわいとしている奴ら。特に薬を扱ってるって話だよ。麻薬。最近じゃあ行方不明のお手伝いの子の親が柴山を訴えてたらしいけど。なんか、ヤバイよね。」

カオに使われていたら……。そう言いたかったのだろう。如月が押し黙る気持ちが良くわかる。居てもたつてもいられないが何とかしてカオを救出しなくてはならない。今は情報収集が先だ。ふうと深く息を吐くとコトリと扉から音が聞こえた。

「翡翠様……………」

「琥珀！」

扉を少し開けて琥珀を招き入れると琥珀は元の姿に戻った。少しは慣れたのか、のけぞりながら如月が琥珀を見つめる。狭いので恐縮した琥珀を座るように指図したが……琥珀は悩んで如月の隣に座った。酷く沈んだ寢床に並んで座る如月が琥珀に寄り添うような形になったが瞬間、如月が飛び跳ねて寢床の端へと移動した。

「カオは居たか？」

「屋敷はこまなく探しましたがカオリ殿は見受けられませんでしたが、しかし、どうやら地下にも施設が有るらしく、嚴重に見張りまですてておりました。」

「人が居るのなら誰かが接触の為に動くかも知れぬ。続いて見張ってくれるか？」

「承知。…………あの、翡翠様。」

「なんだ？」

「その、翡翠様とカオリ殿は……………」

「カオはわしの想い人だ。琥珀。結婚の約束もした。」

「そそそそそそそ、それは!!!???」

驚いた琥珀が立ち上がるとまたもや寢床が大きく揺れて如月が窓の方に倒れた。すばやく受け身を取って起き上がった如月が声を荒げた。

「ちよつと！約束ってカオリはヒスイくんのこと子供だと思ってるんだよ！そんなのズルいだろ！」

「わしにはカオしかおらん。」

「俺だつてカオリしかいないっての！知ってるんだぜ？サトリとその姿のままだったら諦めるって約束したこと！それに、カ、カオリと一緒に風呂入ったのも！バレたら、カオリが、どう思うかな？」

「誠心誠意で尽くすつもりだが？」

「……。」

「……。」

「……まあ、今はカオを助けるのが先だ。」

「そうだな。」

睨み合うわしと如月を琥珀が目丸くして見ていた。

「……もしやお二人は男色好みで……。」

「「馬鹿^{バカ}」者！」

酷く気落ちした琥珀の声が部屋に響き、わしと如月の声が重なった。

「では、屋敷内の動向を監視してくれ。二時^{ふたとき}ほど経ったら連絡を入れる。」

「承知。……翡翠様、もう一つお伝えしたいことが。あの屋敷には……。」

「屋敷には？」

「……私の気のせいかもしれませんが、気配が。」

「気配と？」

「……龍の気配がいたしました。」

「……。」

「では。」

そう言うとまた鼠に姿を変えた琥珀は扉の向こうに消えて行った。その姿を見届けて扉を閉めたわしに如月が声をかける。

「ねえ、ヒスイくん、龍って何？」

「さあ、わからぬ。わしの世界では天の国に住む神と呼ばれるものだ。その気配がしたと、琥珀は言った。こちらの世界でも龍はいるのか？」

「居るっていうか、居ないっていうか……。空想の世界のものかな。見た人なんていない。でも、居ないとは言い切れない。ヒスイくんの世界で神様だったら、こっちでも龍神って呼ばれる神様は奉られているよ。」

「ふむ。」

そこで、今度はけたたましく部屋の電話から音が鳴った。応対した如月がわしの方を見てニヤリとする。

「ヒスイくんの撒いた餌に柴山が食いついたみたいだよ？今から来いってさ。」

「そうか。では琥珀を呼び戻さなければな。」

「うん。そうだね。癪だけど今回はいい役を琥珀に譲ってあげるよ。」

「そうだな。」

少し噴出して如月と目を合わせる。目的は一つ。如月もわしも大切

な人を助け出す。

必ず。

カオ、無事でいてくれ。

わしを強く想ってくれ。

そうすればわしはカオの元に飛んで行ける。

……幼子の姿がこれほど恨めしいと思ったことは無い。わしの能力を知っていれば助けに来いとわしに念じるのは容易い。前回「門」が現れたのはカオがわしに会いたいと強く思ってくれたからだ。互いの「念」が通じなければ「門」は開かない。カオが窮地に幼子に助けて欲しいなんて考える訳がない……。

琥珀を呼び戻し、簡単な内部の地図を描かせた。情報を頭に叩き込んで敵陣に乗り込む。

「え、ちょっと。もしかしてヒスイくんは鬼丸が書いた地図をもつ覚えちゃったの!？」

「翡翠様には造作もないこと。書いた方はお主が持てばよい。」

「琥珀、お前の想像する兄上は背が高すぎる。」

「そうですね！？では、訂正を。」

水の圈を離れて半年ほど。記憶が揺らぐのか琥珀の想像する兄上は父上の方に良く似ていた。琥珀は一人を尊敬しているのだから、なにか想像が融合してしまつたのであろう。まあ、わしの父親に見えればよいから父上の若いころのようであれば都合が良い。

「じゃあ、行くとしますか。」

「うむ。」

如月を先頭にわしは琥珀と手をつないで部屋をでる。

どこかで誰かがこちらの動向を見張っているに違いない。

カオ、今、そちらへ行くからな。

「カオリさんを探しに来たとか。」

大広間に通されたわしと如月と琥珀は両手にごっそりと宝石を付けたこの家の当主と対面した。

「私は柴山の当主ヒサノ。あなた方、名は？」

「私は如月幸太郎。こちらの親子で山田太郎さんと……ヒスイさんです。」

「……。どうしてもあなた方がカオリさんを探しているかお聞かせ頂きたい。カオリさんは私どもにとって大切な親戚です。事情を聴かずにはいられません。事によってはご協力させてもらいます。」

「まるでカオリさんがこちらでお世話になっているようなものいいですね？まあ、良いでしょう。こちらの山田さんは六年前、カオリさんの恋人だった人です。彼は六年間海外に居たので知らずにいたんです。自分の子供が存在していることに。最近になって帰国して知ったそうですよ？当時の恋人、カオリさんに子供がいることを。」

如月の口からはさらさらと大嘘が紡ぎだされていった。口八丁とはこのことかと感心する。「カオリさんの子供」というところで当主がわしを射抜くように見つめた。ギョツと拳を握ったようにも思える。わしと琥珀を見て親子かどうか見分しているのだろう。

「ヒスイさんは施設に預けられていたんです。でも、母親恋しさからカオリさんに会いに来てしまったと私は聞いています。カオリさんも最近では引き取るつもりで可愛がっていました。どうでしょう？この二人の為にカオリさんの情報がおありなら教えていただけませんか？」

「一つ確かめておいて居たいのですが、その子は間違いなくカオリさんが産んだ子なのですか。」

「ええ。出産はフランスでひっそりと。当時の事お調べになるのでしたらご自由に。」

「女の子……。」

「ええ。女の子です。」

如月は挑戦的にそう言った。その言葉と同時に監視カメラの前でやったようにわしは下を向いて鼻をすする真似をした。涙は出ないの
で手を目にやって手のひらに書いた「水」という文字から水を僅かに
たらしした。

「お……おか……おかあさん……。」

下を向くとぼたぼたと水のしずくがサトリの用意してくれた衣装に
落ちた。下に履物を履いているが上から着ている服はひらひらして
いる。より一層女子に見えるように髪も結わえてもらった。そのわ
しが言った言葉が当主にどう響いたかはその取り巻く雰囲気ですぐ
わかった。

「私どもの知っている情報をあなた方に教えましょう。しかし……
今日はもう遅い。こちらで泊まられてはどうか。」

「ご迷惑でしょうか？もうホテルは取っていますので。」

如月が飄々と断る。本当に断るつもりは毛頭ない。如月は相手の出
方を伺っているのだ。丁寧だが威圧的に話す相手に如月が怯むこと
はなかった。

「いえ、こちらからホテルの方はキャンセルいたします。是非、我
が家でお休みください。」

そう言うとそばに控えていた者に合図をして有無を言わずわした

ちを別の部屋へと案内させた。大きな男3人に囲まれては逃げようもないだろう。

タヌキめ……

わしにしか聞こえない小さな声で如月はつぶやくとわしを見てニヤリと笑った。

敵陣へ（後書き）

ヒスイが着ているのはチュニツクとスパッツです。ちなみに髪型はお下げです。

心壊れる前に（前書き）

遅くなつてすみません。

心壊れる前に

地下の牢獄のような場所ではその男の声は低くずしりと響く。

「与えられた仕事はやらないといかんよなあ。」

頭に血が上っていた私は高瀬から繰り出される拳を掴み切れず、鳩尾にその衝撃を受けた。

高瀬は私が女だからと言って力の加減をするような男ではない。私はその一撃で倒れ、高瀬が付けていたネクタイで高瀬の良いように両腕を後ろ手に縛り上げられてしまった。口の中に鉄の味が広がる。

「いいかつこうだねえ、お嬢ちゃん。あんたの仕事ぶりを見てからとは思ったが……一筋縄ではいかないようだしなあ。」

高瀬に顎を掴まれ顔を上げさせられる。精一杯の抵抗は奥歯を噛みしめるだけだ。

「……足は結構きれいじゃないか。」

その凶暴な手が私の太ももを撫で上げた。ぐ、と息を飲むことしかできない。

高瀬の手が大胆になろうとしたとき高瀬の後ろから黒服の男が現れ

た。

「高瀬さん。ヒサノ様が……。」

何やら後から現れた黒服の男が高瀬に耳打ちした。

チツ、と短く舌打ちすると高瀬は私から離れた。だがその眼は私を捕らえたままだ。

「歳も歳だ。可能性は十分あった筈だ。裏を取ったはずじゃないのか？」

「今、取り直しています。」

「もう、いい。ガキは来てるんだろ？」

何の話をしているかはわからんが高瀬の方に問題が起きたようだ。高瀬は少しいライラしながら口を開いた。

「お前さんの子供が会いに来たってよ。」

「え……。」

私の子供？

「女だっていうじゃないか。ってことはお前の長女ってことだな。」

「長女？」

「ヒスイという名に覚えがあるだろうか？」

まさか。ヒスイ？

「さて、ヒスイは！」

「ふうん。あながちウソでもないのか。……ヒサノは取り込みたいだろうな。ふふ。なあ、柴山は甘い。そもそも長女に継がれる力つてなんだ？柴山の未来なんて俺にはどうだっていい。俺は今、柴山の力が欲しいんだ……能力のあるお前の夫って立場がな。」

「何を……。」

「邪魔なものはいらねえ。」

高瀬が面白そうに私の瞳を探った。

「お前の娘、助けてやってもいいぜ。良い子にして俺の女になるんならな。」

「ヒスイは娘じゃない!!」

「……どっちだって同じさ。よく考えておくんだな。どうすればいいかを。」

そう言つて高瀬は黒服の男と扉の向こうに消える。残されたのは縛られ、転がされた私とキタヲの呻き声だった。

私に今何が出来るだろう。

あの男からサト親子を、ヒスイを……
守らなければ。

「史也ふみや！史也！」

高瀬が去ってからまるでそれを待っていたかのように現れたのは璃音だった。キタヲを膝乗せ、目に涙を浮かべながら私に抗議した。

「酷い！酷いわ！ただ声を聞いてやれば良いだけの話しじゃない！
良い暮らしができたらあんただって満足でしょ！？なんでこんな！」

「……私はここに居たくて居るんじゃない。」

相変わらず自分のことしか考えていない璃音にあきれる。私を誘拐し、両親を殺害したお前たちに私が協力するとも思っているのだらうか？

「史也をこんな目にあわして……あなたは人でなしよ！」

「私が人でなしならお前たちは何だ？お前に言われる筋合いはない
！」

璃音の言葉で体の血が沸騰する。自分が酷く感傷的なのはわかっている。しかし、もうそれを止められそうにもなかった。

「なっ！そんな恰好でよく口答えできたものだわ！あんたなんか高瀬にめっちゃくちゃにされたらいいのよ！……ここから逃げられるわけないわよ？逃げたってあんたの妹がひどい目にあっただけよ。利用できるものは何だって利用する男なんだから！高瀬の本当の恐ろしさを教えてあげようか？」

「璃音……。」

体を苦しそうに折り曲げたキタヲが璃音の声を遮ろうと声をかけた。しかし。興奮した璃音には届かない。

「あの男は私の血のつながった父親なのよ？最低なね！昨日だって私を抱いたのよ！反吐が出るわ！あの男には倫理も人間的な感情もないのよ！あんただって思い知るわ！」

璃音の目に涙が浮かぶ。

以前からよくサトは柴山の家のことを伏魔殿だと言っていた。ここで生きるのは生き地獄だということだ。

だけど璃音、今の私にはお前を同情してやれる度量は無いのだ。

私は絶縁した。

ここがどうなっても私の知ったことではない。私は自分の大切なものしか守る気は無い。

「璃音。私の手のネクタイを解け。」

「なによ、命令するつもり？」

「お前では赤井の応急処置も出来んのだろう？このまま放っておくと酷いぞ。」

「……。」

「解いたところで私はここから出れるわけもない。」

璃音はひと睨みすると諦めたように私の腕のネクタイを解いた。見かねて軽い応急処置をしてもキタヲは青い顔をして痛みを遣り過ぎただけだ。

「赤井を病院に連れて行かないのか？」

「連れて行けるなら連れて行くわよ。ほどぼりが冷めたらあの男だつて史也を助けてくれるわ。」

「そんな事、本当に思ってるのか？おめでたいな。先ほどあの男がどんなに最低か教えてくれたのはお前だろう？璃音。」

「……。」

「ここから出してくれたら上まで赤井を運ぶのを手伝おう。」

「そ、そんなこと……で、出来ないわ。」

「では、見殺しにするんだな。」

「そんな！見殺しだなんて！」

「そうだな……死にはしないだろう。せいぜい腕が曲がるくらいだ。生活に支障は出るだろうが。」

そう私が璃音に告げる。璃音の唇がわなわなと震えた。私の勘が当たったようで、璃音にとってキタヲは特別な存在であるようだった。

「り……璃音……俺のことは放っておけ。」

「で、でも、史也！」

「逃げることは今まで何度も考えて来たんじゃないのか？今逃げないでいつ逃げるんだ？私が居なくなれば高瀬は私を追うだろう。こんなチャンスはもうないぞ。」

畳み掛けるとわかりやすいくらい璃音の瞳が揺れた。

「ここに来たのがバレたらどっちみちお前だって無事ではいられないだろう？璃音。」

璃音は私の言葉にますます動揺した。高瀬が日頃璃音をどんなふう
に扱っているか手に取るように分かる。

暫らく沈黙が続いた。

「逃げよう。璃音。」

そう、言ったのはキタヲだった。

寄り添うようにしている二人をどこか壁の向こう側から見ている自分が見ていた。

ガチャリ

地下からの扉は3枚あって、すべてが施錠されていた。久しぶりに肺に外の空気を入れる。ひんやりとした空気が夜であることを物語っている。

上で何かあったのだろうか、すんなりと私たちはキタヲを連れて上へ上がることができた。

見張りがいない……。

ヒスイに何かあったのだろうか。

どうしてこんなところへ来たのだ。……私を助けようか？

お前のことをどんなに大切に思っているか分からないのだろうか？

目くばせだけで璃音はキタヲを連れて行った。車で逃げるのだろうか、

こちらの為にも時間を稼いでもらわないと困る。

私は……

盛大に逃げたと思えるよう牢の扉をあけっぱなしにして来た。これで奴の気も逸らせるだろう。

ヒスイ。お前はどこにいる。

心が壊れそうだ。

先ほどから感じていたように屋敷の奥で騒ぎが起きている。

どうやら相当な人手が集中しているらしい。私や璃音が地下からあがってこれたのもこのお蔭だろう。

まさか、

ヒスイ？

見つかっては元も子もないので慎重に物陰を進む。奥の様子を伺うと大勢の男の輪の中にヒスイと如月、さらに知らない男が背中を預け合って立っていた。周りの様子からも三人を捕らえようとしているのが分かる。

なにか、手は。

そう思ったとき、一人の男がヒスイに掴みかかって行った。

「小手返し!!」

ドスン!

思わず叫んだ私の声にその場が静かになった。私の声に気付いたのかヒスイが相手の手首を上手くつかんだようで相手の男はお手本通りに畳に落ちた。上手く技を決めたヒスイが私を射抜くように見る。

「カオ!!」

一瞬で。

一瞬の間で大人をすり抜けてヒスイが私の元に向かってくる。

一直線。そこに何も障害などなかったように。

思わず強く抱きしめるとヒスイからも強く抱き返された。

「カオは、わしが守る。」

ヒスイからそんな言葉が漏れる。心が震える気さえした。

「では、わたしはヒスイを守ろう。」

私の言葉にヒスイは大人の様に微笑んだ。ヒスイと並んで立つとパチパチと手を叩くものがいた。

「親子の感動の再開だなあ。」

その声には聞き覚えがある。男たちの輪が崩れ、現れた男に道を開けるように移動しだした。

「どうやってあそこから出たってんだ？お仕置きが必要だな？」

私とヒスイの顔を見比べると高瀬が力任せに襖を叩いた。

バリ

音を立てて襖に穴が開く。高瀬の怒りがビリビリとその場に広がると見ていた男たちが体を堅くしていった。

「ヒサノ。この二人を捕まえて地下に押し込んで！」

高瀬は後ろに控えていた女にそう、言い捨てる。あの女が現当主ヒサノなのだろう。

「高瀬は、柴山の未来など知らないと言った。能力のある私の夫になれればいいのだと。」

「なっ！！！」

私の言葉に指示を出そうとしていたヒサノが動揺して高瀬を見ると高瀬が軽く舌打ちしたのが見えた。

「まったく、一筋縄にはいかねえな！捕まえる！」

男たちが私たちに向かってくる。この人数では私一人では捌ききれない。
どうする？

どうにかヒスイだけでも逃がせないかと思ったとき、ヒスイが私の服の裾を掴んだ。

「カオ、この下に空洞がある。穴をあけるから身を伏せてくれ。」

空洞、とは今まで私が居た祠のついた地下室の事だろうか？そう思っている間にヒスイが床に何やら描き出した。途端、目の前に穴が開いた。

ドスン

ヒスイが指で何かを描く度に目の前の床に穴が開く。
そうして瞬く間に私たちの周りに堀のようなものが出来上がった。

堀の向こうに立つ男はぼかんとその光景を見ていた。

「おい、なんだ？何をした？ ヒサノ！なんだ、あの力は!？」

「……………」

前方に立つ、高瀬とヒサノが黙ってヒスイを見ている。驚くのは無理もない。私だって驚いているんだからな。ただ、この場を利用しない手もない。

「璃音は赤井と逃げたぞ。」

そう、ヒサノに告げると不快そうにヒサノが眉間にしわを寄せた。

「その男が自分の娘を犯していたのを知っていたのか？」

その言葉にヒサノは増々青い顔になった。

「まさか……。」

ヒサノが高瀬を仰ぎ見る。私が思った通り、ヒサノは高瀬をパートナーだと信じていたようだ。

「この、アマツ……！」

高瀬の顔は反対に赤くなっていく。そうだ、仲間割れをすればいい。もう、お前たちの思い通りにはさせてやらん。「うそ、うそよね？」とヒサノが高瀬に詰め寄るのを横目で見ながら私はヒスイが開けた穴を覗き込んだ。そこはちょうど祠の中のようなだった。アレが封印している岩なのか。格子の外からしか見えていなかったが岩が何かを塞ぐように置いてある。このままだと、どうなる？祠の主が出てくる時間は近いのだろうか？

そう思う私の足元から尋常ではない冷気が漏れ出ているのを感じた。

心壊れる前に（後書き）

次回はヒスイ視点です。サブタイトルは「再会」で宜しく願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9846j/>

逆転トリップ！

2011年10月13日11時49分発行